(注意) 講義ノート. 内容は随時変更される.

以下にあるもののうち、三角関数に関するものは経済数学入門の授業では取り扱わない。

「演習問題等」は過去の他のクラスの課題.このクラスでは,参考資料として扱う.

序論

- 1. 数の集合とその記号
- N:自然数全体の集合
- Z: (有理) 整数全体の集合
- Q:有理数(分数)全体の集合
- R:実数全体の集合
- C:複素数全体の集合

埋め込み (embedding) により,

$$\mathbf{N} \subset \mathbf{Z} \subset \mathbf{Q} \subset \mathbf{R} \subset \mathbf{C}$$

とみなすことができる.

濃度 (potency) $\aleph_0, \aleph_1, \aleph_2$.

2. 対応と関数

対応

f が集合 A から集合 B への対応であるとは,A の各要素に対して B の空集合でない部分集合 Y が関係付けられていることをいう.これを

$$\begin{array}{cccc} f & : & A & \rightarrow & B \\ & \omega & & \cup \\ & x & \mapsto & Y = f(x) \end{array}$$

または

$$f$$
 : $A \rightarrow B$ の部分集合全体の集合
$$\omega \qquad \qquad \omega \\ x \mapsto \qquad Y = f(x)$$

で表わす.

記法

関数は対応の特別な場合

対応 f が集合 A から集合 B への関数であるとは、上の対応の定義における Y の要素が一つだけのときをいう。 $(Y = \{y\})$

すなわち、A の各要素に対してB の一つの要素y が対応していることをいう. これを

関数
$$f$$
 : $A \rightarrow B$
$$\omega \qquad \omega$$

$$x \mapsto y = f(x)$$

で表わす.

関数の例: 数列

$$s: \mathbf{N} \to \mathbf{R}$$
 $\omega \qquad \omega$
 $n \mapsto a_n = s(n)$

は、NからRへの関数である.

関数のグラフ

$$G \subset \mathbf{R}^2$$
が関数 $y = f(x)$ のグラフ (graph) であるとは, $G = \left\{ \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \in \mathbf{R}^2 \mid y = f(x) \right\}$ のことをいう.

3. 距離空間

距離が定義されている集合(距離空間)

A: 空集合でない集合のとき, $\forall a, \forall b \in A \Longrightarrow \exists c \in R, c \geq 0$

が、次の(i) \sim (iii) の性質を持つとき、この c を d(a,b) と表わし、a と b との距離という.

(i)
$$d(a,b) \ge 0, \ d(a,b) = 0 \Leftrightarrow a = b$$

(ii)
$$\forall a, \forall b \in A, d(a, b) = d(b, a)$$

(iii)
$$\forall a, \forall b, \forall c \in A, d(a, c) + d(c, b) \ge d(a, b)$$
 (三角不等式)

このとき, (A,d)(または,単に A) を距離空間という.

例
$$\mathbf{R}^2$$
 $\mathbf{R}^2 = \left\{ \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \mid x, y \in \mathbf{R} \right\}$ において, $P = \begin{pmatrix} a_1 \\ a_2 \end{pmatrix}$, $Q = \begin{pmatrix} b_1 \\ b_2 \end{pmatrix}$ のとき
$$d(P,Q) = \sqrt{(|a_1 - b_1|)^2 + (|a_2 - b_2|)^2}$$

とすると,dは距離となる.したがって, \mathbf{R}^2 は距離空間である.

(注) この d を Euclid の距離という.

例 R

d(a,b) = |a-b| とすると, d は距離となる. したがって ${f R}$ は距離空間である.

距離空間における開円盤

距離空間 A において α を中心とする, 半径 ε (> 0) の開円盤を $U_{\varepsilon}(\alpha)$ とすると,

$$U_{\varepsilon}(\alpha) = \{a \in A | d(a, \alpha) < \varepsilon\}$$
 と表せる.

R における開円盤

$$U_{\varepsilon}(\alpha) = \{a \in A | d(a, \alpha) < \varepsilon\} = (\alpha - \varepsilon, \alpha + \varepsilon)$$
 (開区間)

4. 関数の極限, 連続性

関数の極限

$$f: A \to B$$
 関数とする.

$$\forall \varepsilon > 0 \Rightarrow \exists \delta > 0, \forall a \in U_{\delta}(\alpha) - \{\alpha\}, f(a) \in U_{\varepsilon}(\beta)$$
 のとき,

a を α に近づけたときの関数 f の極限は β であるといい, $\lim_{a \to \alpha} f(a) = \beta$ と表わす.

関数の連続性

関数
$$f:A\to B$$
 が点 $\alpha\in A$ で連続であるとは
$$\left\{ egin{array}{c} \mbox{関数値}\,f(\alpha):\hbox{存在} \mbox{ } \mbox{ }$$

関数の極限, 左側極限, 右側極限

以下の議論では, $A \subset R, B \subset R$ とする.

関数
$$f: A \rightarrow B$$

$$\forall \varepsilon > 0 \Rightarrow \exists \delta > 0, \forall a \in (\alpha - \delta, \alpha), f(a) \in U_{\varepsilon}(\beta) \cap \xi \mathfrak{F},$$

a を α に (左から) 近づけたときの関数 f の左側極限の値は β であるといい, $\lim_{a \to \alpha - 0} f(a) = \beta$ と表わす.

$$\forall \varepsilon > 0 \Rightarrow \exists \delta > 0, \forall a \in (\alpha, \alpha + \delta), f(a) \in U_{\varepsilon}(\beta) \ \mathcal{O} \succeq \mathfrak{F},$$

a を α に (右から) 近づけたときの関数 f の右側極限の値は β であるといい, $\lim_{a \to \alpha + 0} f(a) = \beta$ と表わす.

定理

a を点 α に近づけたときの関数 f の極限が存在するならば (その値 $\lim_{a \to a} f(a) = \beta$ とする)

a を点 α に (左から) 近づけたときの関数 f の左側極限,

a を点 α に (右から) 近づけたときの関数 f の右側極限が存在し,

$$\lim_{a o \alpha - 0} f(a) = \lim_{a o \alpha + 0} f(a) = eta$$
である.

逆に,a を点 α に左から近づけたときの関数 f の左側極限と, a を点 α に右から近づけたときの関数 f の右側極限が存在し、

かつ, それらの値が等しければ (共通の値 $\lim_{a \to \alpha - 0} f(a) = \lim_{a \to \alpha + 0} f(a) = \beta$ とする), a を点 α に近づけたときの関数 f の極限が存在し, $\lim_{a \to \alpha} f(a) = \beta$ である.

関数の連続, 左側連続, 右側連続

関数
$$f:A\to B$$
 が点 $\alpha\in A$ で左側連続であるとは
$$\left\{ egin{array}{c} &\mbox{関数値 }f(\alpha):\hbox{存在} \uparrow \\ &\mbox{左側極限 }\lim_{a\to\alpha-0}f(a):\hbox{存在} \\ &\mbox{lim}_{a\to\alpha-0}f(a)=f(\alpha) \end{array} \right\}$$
 であることをいう.
$$\left\{ egin{array}{c} &\mbox{関数値 }f(\alpha):\hbox{存在} \uparrow \\ &\mbox{有側極限 }\lim_{a\to\alpha+0}f(a):\hbox{存在} \uparrow \\ &\mbox{右側極限 }\lim_{a\to\alpha+0}f(a):\hbox{存在} \end{array} \right\}$$
 であることをいう.
$$\left\{ egin{array}{c} &\mbox{に関す } &\mbox{に関す$$

定理

関数 f が点 $a \in A$ で連続であるならば、関数 f は点 a で左側連続かつ右側連続である.

逆に、関数 f が点 $a \in A$ で左側連続かつ右側連続であるならば、関数 f は点 a で連続である.

 $^{\dagger}f:A\to B$ は関数であるから, $\forall a\in A,\exists_1f(a)\in B$ であることは明らかである.

 $\mathbf{R} \to \mathbf{R}$ の場合

ある区間 (開区間) (*a*, *b*) で連続

$$\forall x \in (a,b), f$$
: 連続
$$f \in C^0(a,b)$$

区間 (a,b) が明らかなとき,

$$f \in C^0$$

実数全体で連続

$$f \in C^0(\mathbf{R})$$
 または $f \in C^0$

例

- (i) 連続
- (ii) 極限有り、関数値有り、不連続

- (iii) 極限有り、関数値無し、不連続(注:定義域がRでないもの)
- (iv) 極限なし、左および右側極限有り、左側連続
- (v) 極限なし, 左および右側極限有り, 右側連続
- (vi) 極限なし、左および右側極限有り、関数値有り
- (vii) 極限なし、左および右側極限なし

問:次の関数の極限は存在するか.存在する場合はその値を求めよ.

$$(1) f(x) = \frac{x}{|x|} \mathcal{O} \ \xi \lim_{x \to 0} f(x)$$

(2)
$$f(x) = \frac{x^2}{|x|}$$
 のとき $\lim_{x\to 0} f(x)$

解

(1) 存在しない.

(注)

$$f(x) = \frac{x}{|x|}$$
のとき $\lim_{x \to +0} f(x) = 1$ (右側極限は存在する)
$$f(x) = \frac{x}{|x|}$$
のとき $\lim_{x \to -0} f(x) = -1$ (左側極限は存在する)

(2) 存在する.

$$f(x) = \frac{x^2}{|x|}$$
のとき $\lim_{x\to 0} f(x) = 0$

例題:
$$f(x) = \left(1 + \frac{1}{x}\right)^x$$
 のとき, $\lim_{x \to +\infty} f(x)$ が存在する. (証明)

(1)
$$x \in \mathbf{N} = \{1, 2, 3, ...\}$$
 のとき

$$(1 + \frac{1}{n})^n = {}_{n}C_0 + {}_{n}C_1\frac{1}{n} + {}_{n}C_2(\frac{1}{n})^2 + {}_{n}C_3(\frac{1}{n})^3 + \dots + {}_{n}C_n(\frac{1}{n})^n$$

$$= 1 + \frac{n}{1!} \times \frac{1}{n} + \frac{n(n-1)}{2!} \times \frac{1}{n^2} + \frac{n(n-1)(n-2)}{3!} \times \frac{1}{n^3} + \dots + \frac{1}{n^n}$$

$$= 1 + \frac{1}{1!} + \frac{1}{2!}(1 - \frac{1}{n}) + \frac{1}{3!}(1 - \frac{1}{n})(1 - \frac{2}{n}) + \dots + \frac{1}{n^n}$$

したがって,

$$\lim_{n \to +\infty} \left(1 + \frac{1}{n}\right)^n = 1 + \frac{1}{1!} + \frac{1}{2!} + \frac{1}{3!} + \frac{1}{4!} + \dots = \sum_{k=0}^{+\infty} \frac{1}{k!} (\%)$$

級数は項が無限個ある和であるから、その"和"は普通には求められない. 部分和の数列の極限が存在するとき、 級数が存在するという.

ここで,部分和

$$S_p \stackrel{\leftarrow}{=} 1 + \frac{1}{1!} + \frac{1}{2!} + \frac{1}{3!} + \frac{1}{4!} + \dots + \frac{1}{p!}$$

を考察する.

$$S_{p+1} = 1 + \frac{1}{1!} + \frac{1}{2!} + \frac{1}{3!} + \frac{1}{4!} + \dots + \frac{1}{p!} + \frac{1}{(p+1)!}$$

であるから,

(A)
$$S_{p+1} - S_p = \frac{1}{(p+1)!} > 0$$

よって,

$$\forall p: S_p < S_{p+1} \Longrightarrow S_p:$$
 単調増加

また,

$$T_p \stackrel{\leftarrow}{=} 1 + \frac{1}{1!} + \frac{1}{1 \cdot 2} + \frac{1}{2 \cdot 3} + \frac{1}{3 \cdot 4} + \dots + \frac{1}{(p-1) \cdot p}$$

とおくと,

(B)

$$S_p \le T_p = 1 + \frac{1}{1} + \left(\frac{1}{1} - \frac{1}{2}\right) + \left(\frac{1}{2} - \frac{1}{3}\right) + \left(\frac{1}{3} - \frac{1}{4}\right) + \dots + \left(\frac{1}{p-1} - \frac{1}{p}\right)$$
$$= 3 - \frac{1}{p}$$

(等号は
$$p = 1, 2, 3$$
のとき)

よって,

$$S_p \le T_p = 3 - \frac{1}{p} < 3 \Longrightarrow S_p :$$
上に有界

○Weierstrass の定理: 有界な単調数列は収束するこれを使えば、

(A)&(B)
$$\Longrightarrow \lim_{p \to +\infty} S_p = \sum_{k=0}^{+\infty} \frac{1}{k!} = \lim_{n \to +\infty} \left(1 + \frac{1}{n}\right)^n$$

は存在する. その値をeで表わす.

$$(2) x \in \mathbf{R}, x > 0$$
 のとき

どのような実数 x > 0 も、二つの自然数の組 [n, n+1) で挟むことができる. すなわち、

$$\forall x \in \mathbf{R}, x > 0 \Rightarrow \exists n \in \mathbf{N}, n \le x < n+1$$

すると、逆数を取れば、

$$\frac{1}{n} \ge \frac{1}{x} > \frac{1}{n+1}$$

すなわち,

$$1 + \frac{1}{n} \ge 1 + \frac{1}{x} > 1 + \frac{1}{n+1}$$

$$\left(1 + \frac{1}{n}\right)^{n+1} \ge \left(1 + \frac{1}{x}\right)^{n+1} > \left(1 + \frac{1}{n+1}\right)^{n+1}$$

$$\left(1 + \frac{1}{n}\right)^{n} \left(1 + \frac{1}{n}\right) \ge \left(1 + \frac{1}{x}\right)^{x} \left(1 + \frac{1}{x}\right)^{\beta} > \left(1 + \frac{1}{n+1}\right)^{n+1}$$
但し、 $\beta \stackrel{\leftarrow}{=} (n+1) - x$

ここで, $0<\beta\leq 1$ であり、また, $x\to +\infty$ のとき $n\to +\infty$, $(n+1)\to +\infty$ であるから、各辺で $x\to +\infty$ とすると、

$$\lim_{n \to +\infty} \left(1 + \frac{1}{n}\right)^n \left(1 + \frac{1}{n}\right) \ge \lim_{x \to +\infty} \left(1 + \frac{1}{x}\right)^x \left(1 + \frac{1}{x}\right)^\beta \ge \lim_{(n+1) \to +\infty} \left(1 + \frac{1}{n+1}\right)^{n+1}$$

したがって,

$$e \ge \lim_{x \to +\infty} \left(1 + \frac{1}{x}\right)^x \ge e \Longrightarrow \lim_{x \to +\infty} \left(1 + \frac{1}{x}\right)^x = e$$

問題

 $f(x) = \left(1 + \frac{1}{x}\right)^x$ のとき, $\lim_{x \to +\infty} f(x)$ が存在することを仮定し, その値を e で表す. このとき,

問 I:次の値を求めよ.

$$(1) \lim_{x \to -\infty} \left(1 + \frac{1}{x}\right)^x$$

(2)
$$\lim_{x \to +\infty} c \left(1 + \frac{1}{x}\right)^{ax}$$

(3) $\lim_{x\to+\infty} c\left(1+\frac{a}{x}\right)^x$ 問 II: 次のそれぞれに答えよ.

(4) $\lim_{x\to +\infty} c\left(1+\frac{a}{x}\right)^{bx} = c\left(1+\alpha\right)$ のとき, a の値を求めよ.

(注) この a の値は期間 b 後に、(単利計算で) 金利 α となるように c 円お金を借りたときの、(理論的な複 利計算の基の)金利である.

(5) $\lim_{x \to +\infty} 10000 \left(1 + \frac{a}{x}\right)^x = 10000 (1 + 0.1)$ のとき, a の値を求めよ.

(6) (5) の a の値を用いて, $y = \lim_{x \to +\infty} 10000 \left(1 + \frac{a}{x}\right)^{\frac{182.5}{365}x}$ の値を求めよ.

(注) この y の値は, 365 日後に (理論複利で)10%の金利を払う約束で 10,000 円借りたものを, 182.5 日後 に返すときの理論上の元利合計の金額である.

また、それは $10000(1+0.1)^{\frac{1}{2}}$ と同じ値である.

解

 $f(x) = (1 + \frac{1}{x})^x$ のとき, $\lim_{x \to +\infty} f(x)$ が存在することを仮定し, その値をeで表す. このとき

(1)

$$\lim_{x \to -\infty} \left(1 + \frac{1}{x}\right)^x = \lim_{t \to +\infty} \left(1 - \frac{1}{t}\right)^{-t} \quad (t \stackrel{\leftarrow}{=} -x)$$

$$= \lim_{t \to +\infty} \left[\frac{1}{\left(1 - \frac{1}{t}\right)}\right]^t$$

$$= \lim_{t \to +\infty} \left(\frac{t}{t-1}\right)^t$$

$$= \lim_{r \to +\infty} \left(\frac{r+1}{r}\right)^{r+1} \quad (r \stackrel{\leftarrow}{=} t - 1)$$

$$= \lim_{r \to +\infty} \left[\left(1 + \frac{1}{r}\right)^r \left(1 + \frac{1}{r}\right)\right]$$

$$= e$$

(2)

$$\lim_{x \to +\infty} c \left(1 + \frac{1}{x}\right)^{ax} = c \lim_{x \to +\infty} \left[\left(1 + \frac{1}{x}\right)^x\right]^a$$
$$= ce^a$$

$$A \stackrel{\leftarrow}{=} \lim_{x \to +\infty} c \left(1 + \frac{a}{x}\right)^x$$
とする.

(3) (i)
$$a = 0 \Longrightarrow \lim_{x \to +\infty} c \left(1 + 0\right)^x = c$$
 $a \neq 0 \Longrightarrow A = c \lim_{x \to +\infty} \left(1 + \frac{1}{\frac{x}{a}}\right)^{\frac{x}{a} \cdot a}$

$$a > 0 \Longrightarrow \frac{x}{a} \to +\infty$$

(ii)
$$A = c \left[\lim_{\frac{x}{a} \to +\infty} \left(1 + \frac{1}{\frac{x}{a}} \right)^{\frac{x}{a}} \right]^{a} = ce^{a}$$

$$a < 0 \Longrightarrow \frac{x}{a} \to -\infty$$

(iii)
$$A=c\left[\lim_{\substack{x\to-\infty\\a\to-\infty}}\left(1+\frac{1}{\frac{x}{a}}\right)^{\frac{x}{a}}\right]^a=ce^a\quad((1)$$
 参照)
$$(\mathrm{i})$$
 では $c=ce^0$ であるから, $\lim_{x\to+\infty}c\left(1+\frac{a}{x}\right)^x=ce^a$

$$\lim_{x \to +\infty} c \left(1 + \frac{a}{x}\right)^{bx} = c \left(1 + \alpha\right) \, \, \forall \, \forall \, \delta \, \, (b \neq 0 \,\,,\,\, c \neq 0).$$

(4)
$$($$
左辺 $) = c \cdot e^{ab} \Longrightarrow e^{ab} = 1 + \alpha \ (c \neq 0)$ $ab = \log(1 + \alpha) \Longrightarrow a = \frac{\log(1 + \alpha)}{b} \ (b \neq 0)$

$$\lim_{x \to +\infty} 10000 \left(1 + \frac{a}{x}\right)^x = 10000 \left(1 + 0.1\right)$$
 とする. (左辺) = $10000 \cdot e^a \Longrightarrow e^a = 1 + 0.1$

5)
$$(左辺) = 10000 \cdot e^a \Longrightarrow e^a = 1 + 0.5$$
 $a = \log 1.1$

$$y = \lim_{x \to +\infty} 10000 \left(1 + \frac{a}{x}\right)^{\frac{182.5}{365}x} = 10000 e^{\frac{182.5}{365}a} = 10000 \left(e^{a}\right)^{\frac{182.5}{365}}$$

$$(6) \qquad a = \log 1.1 \Longrightarrow e^{\log 1.1} = 1.1$$

$$y = 10000 \times 1.1^{\frac{1}{2}} = 10000\sqrt{1.1}$$

導関数

関数 f が、ある点 x で微分可能とは、極限 (h の関数の)

$$\lim_{h \to 0} \frac{f(x+h) - f(x)}{h}$$

が存在することである.

この値を f'(x), $\frac{df}{dx}$, y', $\frac{dy}{dx}$ 等と表わす.

注意: f は点xで微分可能 $\Longrightarrow f$ は点xで連続

ある区間 (a,b) の各点で微分可能なとき,f は区間 (a,b) で微分可能という.このとき,f' は $(a,b) \longrightarrow \mathbb{R}$ の 関数となるが,この f' を関数 f の 導関数 という.

(a,b) で f が微分可能で, f'が連続(連続微分可能という) なとき,

$$f \in C^1(a,b)$$
 または $f \in C^1$

で表わす.実数全体 ($\mathbf{R}=(-\infty,+\infty)$) で微分可能で f' が連続なとき、

$$f \in C^1(R)$$
 または $f \in C^1 = \{f | f : 1 回 (以上) 微分可能, $f' : 連続 \}$$

で表わす.

注意 : $f \in C^1 \Longrightarrow f \in C^0$

<u>例題</u>: $f(x) = x^n (n \in N)$

(解)

$$f'(x) = \lim_{h \to 0} \frac{f(x+h) - f(x)}{h}$$

$$= \lim_{h \to 0} \frac{(x+h)^n - x^n}{h}$$

$$= \lim_{h \to 0} \frac{1}{h} [\{{}_n C_0 x^n + {}_n C_1 x^{n-1} h + {}_n C_2 x^{n-2} h^2 + \dots + {}_n C_n h^n\} - x^n]$$

$$= \lim_{h \to 0} \frac{1}{h} [{}_n C_1 x^{n-1} h + \{{}_n C_2 x^{n-2} + \dots + {}_n C_n h^{n-2}\} h^2]$$

$$= \lim_{h \to 0} [n x^{n-1} + \{{}_n C_2 x^{n-2} + \dots + {}_n C_n h^{n-2}\} h]$$

$$= n x^{n-1}$$

例題: $f(x) \equiv C(C \in \mathbb{R}$:定数) のとき

(解)

$$f'(x) = \lim_{h \to 0} \frac{f(x+h) - f(x)}{h}$$

$$= \lim_{h \to 0} \frac{C - C}{h}$$

$$= \lim_{h \to 0} \frac{0}{h}$$

$$= \lim_{h \to 0} 0$$

$$= 0$$

したがって、 $n \in \mathbb{N}_0 = \mathbb{N} \cup 0$ のとき、 $f'(x) = nx^{n-1}$.

(注)「公式」ではx=0のとき、計算できないように見えるが、上で示しているようにx=0でも計算でき、そのときの値は0である.

関数の演算(1)

スカラー (scalar) $\lambda \in R$

これらから, 関数のスカラー倍, 和, 差, 値の積, 値の商演算による新しい関数を作ることができる:

微分公式

$$\begin{split} &\{\lambda f\}' = \lambda f' \\ &\{f \pm g\}' = f' \pm g' \\ &\{f \cdot g\}' = f' \cdot g + f \cdot g' \text{ (値の積)} \\ &\left\{\frac{f}{g}\right\}' = \frac{f' \cdot g - f \cdot g'}{g^2} \text{ (値の商)} \end{split}$$

(証明) 値の商を新しい関数の値とするような関数についてのみ行う. 他は演習.

$$F \stackrel{\leftarrow}{=} \left\{ \frac{f}{g} \right\}$$
 とする.

$$\begin{split} F'(x) &= \lim_{h \to 0} \frac{F(x+h) - F(x)}{h} \\ &= \lim_{h \to 0} \frac{\frac{f(x+h)}{g(x+h)} - \frac{f(x)}{g(x)}}{h} \\ &= \lim_{h \to 0} \frac{1}{h} \cdot \frac{f(x+h)g(x) - f(x)g(x+h)}{g(x+h)g(x)} \\ &= \lim_{h \to 0} \frac{1}{h} \cdot \frac{\{f(x+h)g(x) - f(x)g(x)\} - \{f(x)g(x+h) - f(x)g(x)\}}{g(x+h)g(x)} \\ &= \lim_{h \to 0} \frac{1}{g(x+h)g(x)} \cdot \left[\frac{\{f(x+h) - f(x)\}g(x)}{h} - \frac{f(x)\{g(x+h) - g(x)\}}{h} \right] \\ &= \frac{f'(x)g(x) - f(x)g'(x)}{\{g(x)\}^2} \end{split}$$

よって、
$$\left\{\frac{f}{g}\right\}' = \frac{f' \cdot g - f \cdot g'}{g^2}$$

例題 $\underline{A}: f(x) = \frac{x}{1+x^2}$

(解)

$$f'(x) = \frac{(x)'(1+x^2) - x(1+x^2)'}{(1+x^2)^2}$$
$$= \frac{1 \cdot (1+x^2) - x \cdot 2x}{(1+x^2)^2}$$
$$= \frac{1-x^2}{(1+x^2)^2}$$

<u>例題</u>: $f(x) = x^n (n \in \mathbb{Z})$ (解)

 $n \ge 0$ のときは OK. (既に示した). n < 0 のときを行う. m = -n とおくと, m > 0. すると,

$$f(x) = x^n = x^{-m} = \frac{1}{x^m}$$
だから、微分公式より

$$f'(x) = \frac{(1)' \cdot x^m - 1 \cdot (x^m)'}{(x^m)^2}$$
$$= \frac{-mx^{m-1}}{x^{2m}}$$
$$= -mx^{-m-1}$$
$$= nx^{n-1}$$

合成関数の微分公式

のとき, 合成関数

$$g \circ f : R \rightarrow R$$

$$\omega \qquad \omega$$

$$x \mapsto z (= (g \circ f)(x))$$

このとき,次の公式が成り立つ

$$(g \circ f)' = g' \cdot f'$$

i.e.

$$\frac{dz}{dx} = \frac{dz}{dy} \cdot \frac{dy}{dx}$$

<u>例題</u>: $f(x) = x^{\alpha} (\alpha \in \mathbf{Q})$

 α は有理数だから, $\alpha=\frac{q}{p}$, $p,q\in\mathbf{Z}$, $p\neq0$ とおける. すると,

$$y = x^{\alpha} = x^{\frac{q}{p}} \Longleftrightarrow y^p = x^q \stackrel{\rightarrow}{=} z$$

よって、合成関数の微分公式から、

$$\frac{dz}{dx} = \frac{dz}{dy} \cdot \frac{dy}{dx} \Longleftrightarrow qx^{q-1} = p y^{p-1} \cdot \frac{dy}{dx}$$

したがって

$$\frac{dy}{dx} = \frac{q}{p} \cdot \frac{x^{q-1}}{y^{p-1}} \cdot \frac{y}{y}$$
$$= \frac{q}{p} \cdot \frac{x^{q-1} \cdot x^{\frac{q}{p}}}{x^q}$$
$$= \frac{q}{p} x^{\frac{q}{p}-1}$$
$$= \alpha x^{\alpha-1}$$

$$u \stackrel{\leftarrow}{=} 1 - x^2$$
とおくと

$$y = \sqrt{u} = u^{\frac{1}{2}}$$

$$\frac{dy}{dx} = \frac{dy}{du} \cdot \frac{du}{dx}$$

$$= \frac{1}{2}u^{-\frac{1}{2}} \cdot (-2x)$$

$$= \frac{-x}{\sqrt{u}}$$

$$= -\frac{x}{\sqrt{1-x^2}}$$

$$f(x) = x \cdot (1+x^2)^{-1}$$

$$f'(x) = (x)' \cdot (1+x^2)^{-1} + x \cdot \{(1+x^2)^{-1}\}'$$

$$= 1 \cdot (1+x^2)^{-1} + x \cdot (-1)(1+x^2)^{-2} \cdot (1+x^2)'$$

$$= (1+x^2)^{-1} + x \cdot (-1)(1+x^2)^{-2} \cdot 2x$$

$$= \frac{(1+x^2) + x \cdot (-1) \cdot 2x}{(1+x^2)^2}$$

$$= \frac{1-x^2}{(1+x^2)^2}$$

解析学入門 演習問題

学籍番号_____ 氏名____

次の関数を微分せよ (全員,解答すること).

- (1) $f(x) = x^2 (1-x)$
- $(2) \qquad f(x) = 1 x^2$
- (3) $f(x) = (1-x)^2$
- $(4) f(x) = x^2 \log x (x > 0)$
- (5) $f(x) = \log(x^2)$ (x > 0)
- (6) $f(x) = (\log x)^2$ (x > 0)
- $(7) f(x) = x^2 e^x$
- $(8) f(x) = e^{x^2}$
- $(9) f(x) = (e^x)^2$
- (10) $f(x) = e^{(\log x)^2 + 1}$ (x > 0)

裏に続く

金利の計算(余裕があれば、計算せよ.)

 $f(x) = \left(1 + \frac{1}{x}\right)^x$ のとき, $\lim_{x \to +\infty} f(x)$ が存在することを仮定し, その値を e で表す. このとき,

問 I: 次の値を求めよ.

$$\lim_{x \to -\infty} \left(1 + \frac{1}{x}\right)^x$$

$$\lim_{x \to +\infty} c \left(1 + \frac{1}{x}\right)^{ax}$$

$$\lim_{x \to +\infty} c \left(1 + \frac{a}{x}\right)^x$$

問 II: 次のそれぞれに答えよ.

(4) $\lim_{x\to+\infty}c\left(1+\frac{a}{x}\right)^{bx}=c\left(1+\alpha\right)$ のとき, a の値を求めよ.

の基の) 金利である.

- (5) $\lim_{x \to +\infty} 10000 \left(1 + \frac{a}{x}\right)^x = 10000 (1 + 0.1)$ のとき, a の値を求めよ.

(6) (5) の a の値を用いて, $y=\lim_{x\to +\infty}10000 \left(1+\frac{a}{x}\right)^{\frac{182.5}{365}x}$ の値を求めよ. (注) この y の値は, 365 日後に (理論複利で)10%の金利を払う約束で 10,000 円借りたものを, 182.5 日後に返す ときの理論上の元利合計の金額である.

また、それは $10000(1+0.1)^{\frac{1}{2}}$ と同じ値である.

解析学入門 演習問題 解答例

次の関数を微分せよ.

(1)
$$f(x) = x^2 (1-x) \Longrightarrow f'(x) = 2x - 3x^2 (= -3x^2 + 2x)$$

(2)
$$f(x) = 1 - x^2 \Longrightarrow f'(x) = -2x$$

(3)
$$f(x) = (1-x)^2 \Longrightarrow f'(x) = -2 + 2x \ (= 2x - 2)$$

$$(4) f(x) = x^2 \log x (x > 0) \Longrightarrow f'(x) = x(2 \log x + 1)$$

(5)
$$f(x) = \log(x^2) \qquad (x > 0) \Longrightarrow f'(x) = \frac{2}{x^2}$$

$$(4) f(x) = x^2 \log x (x > 0) \Longrightarrow f'(x) = x(2 \log x + 1)$$

$$(5) f(x) = \log(x^2) (x > 0) \Longrightarrow f'(x) = \frac{2}{x}$$

$$(6) f(x) = (\log x)^2 (x > 0) \Longrightarrow f'(x) = \frac{2 \log x}{x}$$

(7)
$$f(x) = x^2 e^x \Longrightarrow f'(x) = x e^x (x+2)$$

(8)
$$f(x) = e^{x^2} \Longrightarrow f'(x) = 2xe^{x^2}$$

(9)
$$f(x) = (e^x)^2 \Longrightarrow f'(x) = 2e^{2x}$$

(10)
$$f(x) = e^{(\log x)^2 + 1}$$
 $(x > 0) \Longrightarrow f'(x) = \frac{2e^{(\log x)^2 + 1} \log x}{x}$

演習問題解説

(1)
$$f'(x) = (x^2)' \cdot (1-x) + x^2 \cdot (1-x)' = 2x \cdot (1-x) + x^2 \cdot (-1)$$

= $2x - 2x^2 - x^2 = 2x - 3x^2$

(注)
$$f(x) = x^2 - x^3 \Rightarrow f'(x) = 2x - 3x^2$$

(2)
$$f(x) = 1 - x^2 \Longrightarrow \begin{cases} y = 1 - u \\ u = x^2 \end{cases}$$

$$\Rightarrow \frac{dy}{dx} = \frac{dy}{du} \cdot \frac{du}{dx} = (-1) \cdot (x^2)' = -2x$$

(注)
$$f'(x) = (1)' - (x^2)' = 0 - 2x = -2x$$

(3)
$$f(x) = (1-x)^2 \Longrightarrow \begin{cases} y = u^2 \\ u = 1 - x \end{cases}$$
$$\Rightarrow \frac{dy}{dx} = \frac{dy}{du} \cdot \frac{du}{dx} = 2u \cdot (1-x)' = 2(1-x) \cdot (-1) = -2 + 2x$$

(注)
$$f(x) = 1 - 2x + x^2 \Rightarrow f'(x) = -2 + 2x$$

(4)
$$f(x) = x^2 \log x$$
 $(x > 0) \Longrightarrow$

$$f'(x) = 2x \cdot \log x + x^2 \cdot \frac{1}{x} = x(2\log x + 1)$$

(5)
$$f(x) = \log(x^2)$$
 $(x > 0) \Longrightarrow f'(x) = \frac{1}{x^2} \cdot (2x) = \frac{2}{x}$

(注1)
$$f(x) = 2\log x \Rightarrow f'(x) = \frac{2}{x}$$

(注 2)
$$x$$
 の条件は $x \neq 0$ でもよい.

(6)
$$f(x) = (\log x)^2$$
 $(x > 0) \Longrightarrow f'(x) = 2(\log x) \cdot \frac{1}{x} = \frac{2\log x}{x}$

(7)
$$f(x) = x^2 e^x \Longrightarrow f'(x) = 2xe^x + x^2 e^x = xe^x(x+2)$$

(8)
$$f(x) = e^{x^2} \Longrightarrow f'(x) = e^{x^2} \cdot 2x = 2xe^{x^2}$$

(9)
$$f(x) = (e^x)^2 \Longrightarrow f'(x) = 2e^x \cdot e^x = 2e^{2x}$$

(注)
$$f(x) = e^{2x} \Rightarrow f'(x) = e^{2x} \cdot 2 = 2e^{2x}$$

(10)
$$f(x) = e^{(\log x)^2 + 1}$$
 $(x > 0)$

$$\implies f'(x) = e^{(\log x)^2 + 1} \cdot [(\log x)^2 + 1]' = e^{(\log x)^2 + 1} \cdot 2(\log x) \cdot \frac{1}{x}$$
$$= \frac{2e^{(\log x)^2 + 1} \log x}{x}$$

金利の計算 (解答例)

 $f(x) = \left(1 + \frac{1}{x}\right)^x$ のとき, $\lim_{x \to +\infty} f(x)$ が存在することを仮定し, その値を e で表す.このとき,

(1)

$$\lim_{x \to -\infty} \left(1 + \frac{1}{x}\right)^x = \lim_{t \to +\infty} \left(1 - \frac{1}{t}\right)^{-t} \quad (t \stackrel{\leftarrow}{=} - x)$$

$$= \lim_{t \to +\infty} \left[\frac{1}{\left(1 - \frac{1}{t}\right)}\right]^t$$

$$= \lim_{t \to +\infty} \left(\frac{t}{t - 1}\right)^t$$

$$= \lim_{r \to +\infty} \left(\frac{r + 1}{r}\right)^{r+1} \quad (r \stackrel{\leftarrow}{=} t - 1)$$

$$= \lim_{r \to +\infty} \left[\left(1 + \frac{1}{r}\right)^r \left(1 + \frac{1}{r}\right)\right]$$

$$= e$$

(2)

$$\lim_{x \to +\infty} c \left(1 + \frac{1}{x}\right)^{ax} = c \lim_{x \to +\infty} \left[\left(1 + \frac{1}{x}\right)^{x}\right]^{a}$$
$$= ce^{a}$$

$$(3)$$
 $A \stackrel{\leftarrow}{=} \lim_{x \to +\infty} c \left(1 + \frac{a}{x}\right)^x$ とする.

(i)
$$\begin{cases} a = 0 \Longrightarrow \lim_{x \to +\infty} c \left(1 + 0\right)^x = c \\ a \neq 0 \Longrightarrow A = c \lim_{x \to +\infty} \left(1 + \frac{1}{\frac{x}{a}}\right)^{\frac{x}{a} \cdot a} \end{cases}$$
(ii)
$$\begin{cases} a > 0 \Longrightarrow \frac{x}{a} \to +\infty \\ A = c \left[\lim_{\frac{x}{a} \to +\infty} \left(1 + \frac{1}{\frac{x}{a}}\right)^{\frac{x}{a}}\right]^a = ce^a \end{cases}$$
(iii)
$$\begin{cases} a < 0 \Longrightarrow \frac{x}{a} \to -\infty \\ A = c \left[\lim_{\frac{x}{a} \to -\infty} \left(1 + \frac{1}{\frac{x}{a}}\right)^{\frac{x}{a}}\right]^a = ce^a \end{cases}$$

$$((1)$$
 参照)(i) では $c=ce^0$ であるから, $\lim_{x\to +\infty}c\left(1+rac{a}{x}
ight)^x=ce^a$

追加の例題

次の関数を微分せよ.

$$f(x) = \sqrt{1 + \frac{x^2}{2}}$$
(解)

$$f(x) = \sqrt{1 + \frac{x^2}{2}} = (1 + \frac{x^2}{2})^{\frac{1}{2}}$$

$$f'(x) = \frac{1}{2}(1 + \frac{x^2}{2})^{-\frac{1}{2}} \cdot (1 + \frac{x^2}{2})'$$

$$= \frac{x}{2\sqrt{1 + \frac{x^2}{2}}} \quad \cdots 標準的な解答$$

$$= \frac{x}{\sqrt{4 + 2x^2}} \quad \cdots (これ以下の解答も OK)$$

$$= \sqrt{\frac{x^2}{4 + 2x^2}}$$

$$= \frac{1}{\sqrt{\frac{4}{x^2} + 2}}$$

対数関数,指数関数

$$f(x) = \log x \quad (\boxtimes \mathbb{U}, x > 0) \longrightarrow f'(x) = \frac{1}{x}$$

 $f(x) = e^x \longrightarrow f'(x) = e^x$

(注意) $\log \mathcal{O}$ 性質. $\log 1 = 0$, $\log_e e = 1$

$$\log(xy) = \log x + \log y, \log(\frac{x}{y}) = \log x - \log y$$
$$\log(x^y) = y \log x$$

(証明)

 $f(x) = \log_e x$ のとき.

$$f'(x) = \lim_{h \to 0} \frac{\log(x+h) - \log x}{h}$$
$$= \lim_{h \to 0} \frac{1}{h} \log(1 + \frac{h}{x})$$

ここで, $t\stackrel{\leftarrow}{=}\frac{x}{h}$ すなわち, $\frac{h}{x}=\frac{1}{t}$, $\frac{1}{h}=\frac{t}{x}$ とすると, $h\to 0$ のとき, $t\to \pm \infty$. したがって,

$$f'(x) = \lim_{t \to \pm \infty} \frac{t}{x} \log(1 + \frac{1}{t})$$
$$= \lim_{t \to \pm \infty} \frac{1}{x} \log(1 + \frac{1}{t})^t$$

ここで,

(i) t > 0(t > 0(t > 0) t > 0(t > 0)

$$\lim_{t \to +\infty} \frac{1}{x} \log(1 + \frac{1}{t})^t = \frac{1}{x} \log_e e$$
$$= \frac{1}{x}$$

(ii) t < 0(すなわち $t \to -\infty$) のとき, $s \stackrel{\leftarrow}{=} -t$ とおくと,

$$\begin{split} \lim_{t \to -\infty} \log \left(1 + \frac{1}{t}\right)^t &= \lim_{s \to +\infty} \log \left(1 - \frac{1}{s}\right)^{-s} \\ &= \lim_{s \to +\infty} \log \left[\left(1 - \frac{1}{s}\right)^{-1}\right]^s \\ & = \zeta \, \text{Tr}, \left(1 - \frac{1}{s}\right)^{-1} = \frac{1}{1 - \frac{1}{s}} = \frac{1}{\frac{s-1}{s}} = \frac{s}{s-1} \, \text{Tr} \, \text{Br} \, \text{Br}$$

したがって、
$$\lim_{s \to +\infty} \{ (1 - \frac{1}{s})^{-1} \}^s = \lim_{r \to +\infty} (1 + \frac{1}{r})^{r+1}$$

$$= \lim_{r \to +\infty} (1 + \frac{1}{r})^r (1 + \frac{1}{r})$$

$$(= e)$$
したがって、 $\lim_{t \to -\infty} \frac{1}{x} \log(1 + \frac{1}{t})^t = \lim_{s \to +\infty} \frac{1}{x} \log[\{(1 - \frac{1}{s})^{-1}\}^s]$

$$= \lim_{r \to +\infty} \frac{1}{x} \log[(1 + \frac{1}{r})^r (1 + \frac{1}{r})]$$

$$= \frac{1}{x} \log_e e$$

$$= \frac{1}{x}$$

 $f(x) = e^x \mathcal{O}$ ≥ 3 .

$$y = e^x \iff \log y = x \stackrel{\rightarrow}{=} z$$

すると,

$$\begin{split} \frac{dz}{dx} &= \frac{dz}{dy} \cdot \frac{dy}{dx} \\ \iff 1 &= \frac{1}{y} \cdot \frac{dy}{dx} \\ \\ \text{したがって}, \frac{dy}{dx} &= \frac{1}{\frac{1}{y}} = y = e^x \end{split}$$

(注意) ここで, 指数関数と対数関数はそれぞれ逆関数の関係となっていることに注意する. すなわち,

(性質)
$$\log e^x = x$$
, $e^{\log x} = x$

定理:逆関数の微分公式

関数
$$f$$
 : $X \longrightarrow Y$
$$\omega \qquad \omega$$

$$x \mapsto y = f(x)$$

の逆関数

$$f^{-1}$$
 : $Y \longrightarrow X$

が関数とする.

例題:
$$f(x) = x^x (x \in \mathbf{R}, x > 0)$$

(解)

$$y = x^x \iff \log y = x \log x \stackrel{\rightarrow}{=} z$$

すると,

$$\frac{dz}{dx} = \frac{dz}{dy} \cdot \frac{dy}{dx}$$

$$\iff (x)' \cdot \log x + x \cdot (\log x)' = 1 \cdot \log x + x \cdot \frac{1}{x}$$

$$= \log x + 1$$

$$= \frac{1}{y} \cdot \frac{dy}{dx}$$

$$\Rightarrow (x)' \cdot \log x + x \cdot (\log x)' = 1 \cdot \log x + x \cdot \frac{1}{x}$$

$$\Rightarrow (x)' \cdot \log x + x \cdot (\log x)' = 1 \cdot \log x + x \cdot \frac{1}{x}$$

$$\Rightarrow (x)' \cdot \log x + x \cdot (\log x)' = 1 \cdot \log x + x \cdot \frac{1}{x}$$

したがって,
$$\frac{dy}{dx} = \frac{\log x + 1}{\frac{1}{y}} = y(\log x + 1) = x^x(\log x + 1)$$

例題: $f(x) = x^{\alpha} (\alpha \in \mathbf{R})$

(解)

$$y = x^{\alpha} \Longleftrightarrow \log y = \alpha \log x \stackrel{\rightarrow}{=} z$$

すると,

$$\frac{dz}{dx} = \frac{dz}{dy} \cdot \frac{dy}{dx}$$

$$\iff \alpha \cdot \frac{1}{x} = \frac{1}{y} \cdot \frac{dy}{dx}$$

したがって,
$$\frac{dy}{dx} = \alpha \cdot \frac{\frac{1}{x}}{\frac{1}{y}} = y \cdot \alpha \cdot \frac{1}{x} = x^{\alpha} \cdot \alpha \cdot \frac{1}{x} = \alpha x^{\alpha - 1}$$

三角関数

$$f(x) = \sin x \longrightarrow f'(x) = \cos x$$

$$f(x) = \cos x \longrightarrow f'(x) = -\sin x$$

$$f(x) = \cos x$$
 $\longrightarrow f'(x) = -\sin x$
 $f(x) = \tan x$ $\longrightarrow f'(x) = \frac{1}{(\cos x)^2} (= (\sec x)^2)$

(性質)

$$\cos x = \sin\left(x + \frac{\pi}{2}\right)$$
$$\tan x = \frac{\sin x}{\cos x}$$

$$\tan x = \frac{\sin x}{\cos x}$$

(注意) 三角関数には,
$$\sin x$$
, $\cos x$, $\tan x$ の他 $\cot x = \frac{1}{\tan x}$, $\sec x = \frac{1}{\cos x}$, $\csc x = \frac{1}{\sin x}$ がある.

(証明)

 $f(x) = \sin x$ のときを行う. $f(x) = \cos x$, $f(x) = \tan x$ のときは演習.

(注意 1)
$$\sin A - \sin B = 2\cos\left(\frac{A+B}{2}\right)\sin\left(\frac{A-B}{2}\right)$$

これは、同じ象限にある場合、幾何学的に証明できるので、その結果を利用することにする. (注意 2) $\lim_{x\to 0} \frac{\sin x}{x} = 1$

(注意 2)
$$\lim_{x \to 0} \frac{\sin x}{x} = 1$$

 $f(x) = \sin x$ のとき.

$$f'(x) = \lim_{h \to 0} \sin(x+h) - \frac{\sin x}{h}$$

$$= \lim_{h \to 0} \frac{1}{h} \left[2\cos\left(\frac{(x+h)+x}{2}\right) \sin\left(\frac{(x+h)-x}{2}\right) \right]$$

$$= \lim_{h \to 0} \frac{2}{h} \cos(x+\frac{h}{2}) \sin\frac{h}{2}$$

$$= \lim_{\frac{h}{2} \to 0} \frac{\sin\frac{h}{2}}{\frac{h}{2}} \cos(x+\frac{h}{2})$$

$$= \cos x$$

(注意 3) $(\cos x)^2 + (\sin x)^2 = 1$

(参考)

 $f(x) = \cos x = \sin(x + \frac{\pi}{2})$ のとき.

$$f'(x) = \cos(x + \frac{\pi}{2}) \cdot (x + \frac{\pi}{2})'$$
$$= \cos(x + \frac{\pi}{2}) \cdot 1$$
$$= -\sin x$$

$$f(x) = \tan x = \left(\frac{\sin x}{\cos x}\right)$$
 のとき.

$$f'(x) = \left(\frac{\sin x}{\cos x}\right)'$$

$$= \frac{(\sin x)' \cos x - \sin x(\cos x)'}{(\cos x)^2}$$

$$= \frac{(\cos x)^2 + (\sin x)^2}{(\cos x)^2}$$

$$= \frac{1}{(\cos x)^2}$$

$$(= (\sec x)^2)$$

高階導関数 (高次導関数)

導関数の導関数を 2 階 (2 次) 導関数という (n-1) 階 ((n-1) %) 導関数の導関数を n 階 (n %) 導関数という. 一般に2階(2次)以上の導関数を高階(高次)導関数という.

記号

ー n 階導関数: $f^{(n)}(x)$, $y^{(n)}$, $\frac{d^n f}{dx^n}$, $\frac{d^n y}{dx^n}$ (注) n が小さいとき, たとえば $f^{(2)}$ を f'' と表わす場合がある.

f が n 回微分可能で, $f^{(n)}$ が連続なとき,

$$f \in C^n = \{f | f : n \square (以上) 微分可能, f^{(n)}(x) : 連続 \}$$

で表わす.

f が何回でも微分可能なとき,

$$f \in C^{\infty}$$

で表わす.

例題:

以下は、いずれも $f \in C^{\infty}$

$$f(x) = x^2 \longrightarrow f'(x) = 2x, \qquad f''(x) = 2, \qquad f^{(n)}(x) = 0 \quad (n \ge 3)$$

$$f(x) = \log x \longrightarrow f^{(n)}(x) = \frac{(-1)^{n-1}(n-1)!}{x^n}$$

$$f(x) = e^x \longrightarrow f^{(n)}(x) = e^x$$

問:次の関数のn 階導関数 $f^{(n)}(x)$ と $f^{(n)}(0)$ を求めよ.

$$(1) f(x) = \log(1+x)$$

$$(2) f(x) = \log(1-x)$$

間の解:

(1)

$$f^{(n)}(x) = \frac{(-1)^{n-1}(n-1)!}{(1+x)^n}$$
$$f^{(n)}(0) = (-1)^{n-1}(n-1)!$$

$$f^{(n)}(0) = (-1)^{n-1}(n-1)!$$

(2)
$$f^{(n)}(x) = \frac{-(n-1)!}{(1-x)^n}$$
$$f^{(n)}(0) = -(n-1)!$$

(解析学用)

例題:

$$f(x) = \sin x \longrightarrow f^{(n)}(x) = \sin\left(x + \frac{n\pi}{2}\right), \quad f^{(n)}(0) = \sin\frac{n\pi}{2}.$$

$$f(x) = \cos x \longrightarrow f^{(n)}(x) = \cos\left(x + \frac{n\pi}{2}\right), \quad f^{(n)}(0) = \cos\frac{n\pi}{2}.$$

$$f(x) = \log x \longrightarrow f^{(n)}(x) = \frac{(-1)^{n-1}(n-1)!}{x^n}$$

$$y = \log x, \ y' = x^{-1}, \ y'' = (-1)x^{-2}, \ y''' = (-1)(-2)x^{-3}, \ y^{(4)} = (-1)(-2)(-3)x^{-4},$$

$$\cdots,$$

$$y^{(n)} = (-1)(-2)\cdots(-(n-1))$$

$$= (-1)^{n-1}(n-1)!x^{-n}$$

Leibniz の公式:

$$[u(x)v(x)]^{(n)} = {}_{n}C_{0}u(x)^{(n)}v(x) + {}_{n}C_{1}u(x)^{(n-1)}v'(x) + {}_{n}C_{2}u(x)^{(n-2)}v''(x) + \cdots$$

$$+ {}_{n}C_{n}u(x)v(x)^{(n)}$$

$$(= \sum_{k=0}^{n} {}_{n}C_{k}u(x)^{(n-k)}v(x)^{(k)})$$

$$\not\sqsubseteq \mathcal{U},$$

$$u^{(0)}(x) = u(x)$$

$$v^{(0)}(x) = v(x)$$

(略証) 本来は帰納法で行う.

$$\varphi = uv$$

$$\varphi' = u'v + uv'$$

$$\varphi'' = (u''v + u'v') + (u'v' + uv'')$$

$$= u''v + 2u'v' + uv''$$

$$\varphi''' = (u'''v + u''v') + 2(u''v' + u'v'') + (u'v'' + uv''')$$

$$= u'''v + 3u''v' + 3u'v'' + uv'''$$

$$\vdots$$

$$\varphi^{(n)} = {}_{n}C_{0}u^{(n)}v + {}_{n}C_{1}u^{(n-1)}v' + {}_{n}C_{2}u^{(n-2)}v'' + \dots + {}_{n}C_{n}uv^{(n)}$$

 $\varphi(x) \stackrel{\leftarrow}{=} u(x)v(x)$ (値の積) とする.

例題: $f(x) = x^2 e^x$ のとき, $f^{(n)}(x)$ と $f^{(n)}(0)$ を求めよ.

$$f^{(n)}(x) = {}_{n}C_{0}(x^{2})^{(n)}e^{x} + \dots + {}_{n}C_{n-3}(x^{2})^{\prime\prime\prime}(e^{x})^{(n-3)}$$

$$+ {}_{n}C_{n-2}(x^{2})^{\prime\prime}(e^{x})^{(n-2)} + {}_{n}C_{n-1}(x^{2})^{\prime}(e^{x})^{(n-1)} + {}_{n}C_{n}x^{2}(e^{x})^{(n)}$$

$$= \frac{n(n-1)}{2} \cdot 2 \cdot e^{x} + n \cdot 2x \cdot e^{x} + x^{2}e^{x}$$

$$= [x^{2} + 2nx + n(n-1)]e^{x},$$

$$f^{(n)}(0) = n^{2} - n.$$

問:次の関数の n 次導関数 $f^{(n)}(x)$ と $f^{(n)}(0)$ を求めよ.

$$f(x) = xe^{-x}$$

問の解:

(3)

$$f^{(n)}(x) = (-1)^{n-1}(n-x)e^{-x}$$
$$f^{(n)}(0) = (-1)^{n-1}n$$

最大最小

補題 1 f:[a,b] で連続 $\Longrightarrow [a,b]$ で最大値と最小値をとる.

補題 2 f:[a,b] で連続, $f(a)=f(b)\Longrightarrow (a,b)$ 内で最大値または最小値をとる.

定理 1: Rolle の定理

$$f \in C^1(a,b), f: [a,b]$$
 で連続, $f(a) = f(b) \Longrightarrow \exists c \in (a,b), f'(c) = 0$

(証明) 補題 1 から, f は [a,b] で最大値および最小値をとるが, f(a)=f(b) であるから, 補題 2 により (a,b) で最大値または最小値をとる。例えば最大値をとったとする。 すなわち,

$$\exists c \in (a,b), f(c) = \max_{x \in [a,b]} f(x)$$

とすると,

$$h \neq 0 \Rightarrow f(c+h) \leq f(c)$$

$$\begin{cases} (i) \ h > 0; \frac{f(c+h) - f(c)}{h} \le 0 \Longrightarrow f'(c) \le 0 \\ (ii) \ h < 0; \frac{f(c+h) - f(c)}{h} \ge 0 \Longrightarrow f'(c) \ge 0 \end{cases}$$

$$(i) \& (ii) \Longrightarrow f'(c) = 0$$

(証明終)

定理 2: (Lagrange の) 平均値の定理

よって、Rolleの定理により

$$\exists c \in (a,b), g'(c) = 0 \Longleftrightarrow f'(c) = \frac{f(b) - f(a)}{b - a}$$

$$f(b) = f(a) + (b-a)f'(a + \theta(b-a)), 0 < \exists \theta < 1$$

(証明) 定理2で

$$a < c < b$$
 より $\theta \stackrel{\longleftarrow}{=} \frac{c-a}{b-a}$ とおくと, $0 < \theta < 1, c = a + \theta(b-a)$

(証明終)

系 2

$$f(a+h) = f(a) + hf'(a+\theta h), 0 < \exists \theta < 1$$

(証明) 系1で

$$h \stackrel{\leftarrow}{=} b - a$$

とおけばよい.(証明終)

定理 3: Cauchy の平均値の定理

$$f,g \in C^1(a,b), f,g : [a,b]$$
 で連続, $g(a) \neq g(b) \Longrightarrow \exists c \in (a,b), \frac{f'(c)}{g'(c)} = \frac{f(b) - f(a)}{g(b) - g(a)}$

(証明)

$$\varphi(x) \stackrel{\leftarrow}{=} (f(b) - f(a))(g(x) - g(a)) - (g(b) - g(a))(f(x) - f(a)) \, \succeq \, \exists \zeta \, \succeq \,,$$

$$\varphi \in C^1, \, \varphi'(x) = (f(b) - f(a))g'(x) - (g(b) - g(a))f'(x)$$

$$\varphi(a) = 0, \, \varphi(b) = 0 \Longrightarrow \varphi(a) = \varphi(b)$$

よって、Rolleの定理により

$$\exists c \in (a,b), \ \varphi'(c) = 0 \Longleftrightarrow (f(b) - f(a))g'(c) = (g(b) - g(a))f'(c)$$
$$\sharp \supset \tau, \ \frac{f'(c)}{g'(c)} = \frac{f(b) - f(a)}{g(b) - g(a)}$$

定理 4: L'Hospital の定理

$$f,g\in C^1(a$$
 の周りで), $f(a)=g(a)=0$ (すなわち $\lim_{x\to a}f(x)=\lim_{x\to a}g(x)=0$)
$$\Longrightarrow \lim_{x\to a}\frac{f(x)}{g(x)}=\lim_{x\to a}\frac{f'(x)}{g'(x)}$$
 (右辺が存在すれば左辺も存在する)

(証明)

$$f(a) = g(a) = 0$$
 より $\frac{f(b)}{g(b)} = \frac{f(b) - f(a)}{g(b) - g(a)}$ ところが、 $\underline{\underline{Cauchy}}$ の定理より、 $\exists c \in (a,b), \frac{f(b) - f(a)}{g(b) - g(a)} = \frac{f'(c)}{g'(c)}$ ここで、 $\underline{\underline{h}} = b - a$ 、 $\underline{\underline{\theta}} = \frac{c - a}{b - a}$ とおくと、 $0 < \theta < 1$ 、 $\underline{\underline{c}} = a + \theta \underline{\underline{h}}$

したがって,

$$\frac{f(a+h)}{g(a+h)} = \frac{f'(a+\theta h)}{g'(a+\theta h)}$$

よって,

$$\lim_{h \to 0} \frac{f(a+h)}{g(a+h)} = \lim_{h \to 0} \frac{f'(a+\theta h)}{g'(a+\theta h)} \Longleftrightarrow \lim_{x \to a} \frac{f(x)}{g(x)} = \lim_{x \to a} \frac{f'(x)}{g'(x)}$$

(証明終)

例題: 次の極限を求めよ: $\lim_{x\to 0} \frac{e^x-1}{x}$ (注) これ以下では, $(e^x)'=e^x$, $(\log x)'=\frac{1}{x}$ 等は既知とする.

L'Hospital
$$\downarrow$$

$$\lim_{x \to 0} \frac{e^x - 1}{x} = \lim_{x \to 0} \frac{(e^x - 1)'}{(x)'} = \lim_{x \to 0} \frac{e^x}{1} = 1$$

問:次の関数の極限を求めよ.

$$\lim_{x \to 1} \frac{\log x}{1 - x}$$

(解)

L'Hospital
$$\lim_{x \to 1} \frac{\log x}{1 - x} = \lim_{x \to 1} \frac{(\log x)'}{(1 - x)'} = \lim_{x \to 1} \frac{\frac{1}{x}}{-1} = -1$$

<u>系</u>: $f,g \in C^1(a \ \text{自身を除いた} \ a \ \text{の周 } \text{りで}), \ \lim_{x \to a} f(x) = \infty \ , \ \lim_{x \to a} g(x) = \infty$

$$\Longrightarrow \lim_{x \to a} \frac{f(x)}{g(x)} = \lim_{x \to a} \frac{f'(x)}{g'(x)}$$
 (右辺が存在すれば左辺も存在する)

(証明) 略

定理: Taylor の定理 (n=2)

$$f\in C^2(a,b$$
 を含むある区間で)
$$\Longrightarrow {}^\exists c\in (a,b), f(b)=f(a)+(b-a)f'(a)+\frac{(b-a)^2}{2}f''(c)$$

(証明)

$$\varphi(x) \stackrel{\leftarrow}{=} f(b) - \{f(x) + (b-x)f'(x)\} - \frac{(b-x)^2}{(b-a)^2} \cdot K$$
 但し, $K = [f(b) - \{f(a) + (b-a)f'(a)\}]$

とおく. すると, $\varphi \in C^1, \varphi(a) = 0, \ \varphi(b) = 0 \Longrightarrow \varphi(a) = \varphi(b)$ よって, Rolle の定理により

$$\exists c \in (a,b), \, \varphi'(c) = 0$$

ところで,

$$\varphi'(x) = -\left[f'(x) + \left\{-f'(x) + (b-x)f''(x)\right\}\right] - \frac{2(b-x)\cdot(-1)}{(b-a)^2} \cdot K$$

$$= -(b-x)f''(x) + \frac{2(b-x)}{(b-a)^2} \cdot K$$

$$= (b-x)\left[\frac{2K}{(b-a)^2} - f''(x)\right]$$

よって,

$$\varphi'(c) = (b-c) \left[\frac{2K}{(b-a)^2} - f''(c) \right] = 0$$

 $b \neq c$ であるから,

$$\frac{2K}{(b-a)^2} = f''(c)$$

すなわち,

$$K = \frac{(b-a)^2}{2} \cdot f''(c)$$

したがって,

$$f(b) = f(a) + (b - a)f'(a) + \frac{(b - a)^2}{2}f''(c)$$

(証明終)

系1

$$f(a+h) = f(a) + hf'(a) + \frac{h^2}{2}f''(a+\theta h), 0 < \exists \theta < 1$$

(証明)a < b のとき, 定理において

$$a < c < b$$
 より $\theta \stackrel{\leftarrow}{=} \frac{c-a}{b-a}$ とおくと,
$$0 < \theta < 1, \, c = a + \theta(b-a)$$

また,

$$h \stackrel{\leftarrow}{=} b - a$$

とおくと,

$$b = a + h$$
, $c = a + \theta(b - a) = a + \theta h$

(注) b < a のとき, 問とする. (証明終)

系 2: Maclaurin の定理 (n=2)

(証明)

系 1で,a=0, h=x とすればよい.

(証明終)

例題

x=0 の周りで Taylor の定理を用いて 1 次以下の式で近似せよ.(2 次の剰余項まで示せ)

(1)
$$f(x) = \frac{1}{1+x}$$

(2)
$$f(x) = \frac{1}{\sqrt{1 - \frac{x}{2}}}$$

例題解答

x=0 の周りで Taylor の定理を用いて 1 次以下の式で近似せよ.(2 次の剰余項まで示せ)

$$(1) \qquad f(x) = \frac{1}{1+x}$$

[
$$\mathbf{M}$$
] $f(x) = 1 - x + x^2(1 + \theta x)^{-3}$

$$f(x) = \frac{1}{1+x} = (1+x)^{-1}$$

$$f'(x) = -(1+x)^{-2}$$

$$f''(x) = (-1)(-2)(1+x)^{-3}$$

$$f(0) = 1, f'(0) = -1, f''(\theta x) = 2(1+\theta x)^{-3}$$

$$f(x) = f(0) + xf'(0) + \frac{x^2}{2}f''(\theta) = 1 - x + x^2(1+\theta x)^{-3}$$

(2)
$$f(x) = \frac{1}{\sqrt{1 - \frac{x}{2}}}$$

[Mg]
$$f(x) = 1 + \frac{x}{4} + \frac{3}{32}x^2(1 - \frac{\theta x}{2})^{-\frac{5}{2}}$$

$$f(x) = \frac{1}{\sqrt{1 - \frac{x}{2}}} = (1 - \frac{x}{2})^{-\frac{1}{2}}$$

$$f'(x) = (-\frac{1}{2})(1 - \frac{x}{2})^{-\frac{3}{2}}(-\frac{1}{2})$$

$$f''(X) = (-\frac{1}{2})(-\frac{3}{2})(1 - \frac{x}{2})^{-\frac{5}{2}}(-\frac{1}{2})^{2}$$

$$f(0) = 1, f'(0) = \frac{1}{4}, f''(\theta x) = \frac{3}{16}((1 - \frac{\theta x}{2})^{-\frac{5}{2}}$$

$$f(x) = f(0) + xf'(0) + \frac{x^2}{2}f''(\theta) = 1 + \frac{x}{4} + \frac{3}{32}x^2(1 - \frac{\theta x}{2})^{-\frac{5}{2}}$$

定理 5: Taylor の定理

$$f \in C^n(a,b \, \text{を含むある区間で})$$

$$\implies \exists c \in (a,b), f(b) = f(a) + \frac{(b-a)}{1!}f'(a) + \frac{(b-a)^2}{2!}f''(a) + \dots + \frac{(b-a)^{n-1}}{(n-1)!}f^{(n-1)}(a) + \frac{(b-a)^n}{n!}f^{(n)}(c)$$
(証明)

$$\varphi(x) \stackrel{\leftarrow}{=} f(b) - \left\{ f(x) + \frac{(b-x)}{1!} f'(x) + \frac{(b-x)^2}{2!} f''(x) + \dots + \frac{(b-x)^{n-1}}{(n-1)!} f^{(n-1)}(x) \right\} - \frac{(b-x)^n}{(b-a)^n} \left[f(b) - \left\{ f(a) + \frac{(b-a)}{1!} f'(a) + \frac{(b-a)^n}{n-1} f'(a) + \frac{(b-a)^n}{n-$$

$$K \stackrel{\leftarrow}{=} \left[f(b) - \left\{ f(a) + \frac{(b-a)}{1!} f'(a) + \frac{(b-a)^2}{2!} f''(a) + \dots + \frac{(b-a)^{n-1}}{(n-1)!} f^{(n-1)}(a) \right\} \right]$$
 まず、 $1 \le k \le n-1$ のとき、

$$\begin{split} \left[\frac{(b-x)^k}{k!} \cdot f^{(k)}(x)\right]' &= \left[\frac{(b-x)^k}{k!}\right]' \cdot f^{(k)}(x) + \frac{(b-x)^k}{k!} \cdot \left[f^{(k)}(x)\right] \\ &= \frac{k(b-x)^{k-1} \cdot (b-x)'}{k!} \cdot f^{(k)}(x) + \frac{(b-x)^k}{k!} \cdot f^{(k+1)}(x) \\ &= -\frac{(b-x)^{k-1}}{(k-1)!} \cdot f^{(k)}(x) + \frac{(b-x)^k}{k!} \cdot f^{(k+1)}(x) \end{split}$$
 (但し, $0! = 1$ とする.)

また,

$$\left[\frac{(b-x)^n}{(b-a)^n}\right]' = \frac{n(b-x)^{n-1} \cdot (-1)}{(b-a)^n}$$

したがって, $\varphi \in C^1$,

$$\varphi'(x) = -\left[f'(x) + \left\{-f'(x) + \frac{(b-x)}{1!}f''(x)\right\} + \left\{-\frac{(b-x)}{1!}f''(x) + \frac{(b-x)^2}{2!}f'''(x)\right\} + \cdots + \left\{-\frac{(b-x)^{n-2}}{(n-2)!}f^{(n-1)}(x) + \frac{(b-x)^{n-1}}{(n-1)!}f^{(n)}(x)\right\}\right] + \frac{n(b-x)^{n-1}}{(b-a)^n} \cdot K$$

$$= -\frac{(b-x)^{n-1}}{(n-1)!}f^{(n)}(x) + \frac{n(b-x)^{n-1}}{(b-a)^n} \cdot K$$

$$= (b-x)^{n-1}\left[\frac{nK}{(b-a)^n} - \frac{f^{(n)}(x)}{(n-1)!}\right]$$

$$\varphi(a) = 0, \ \varphi(b) = 0 \Longrightarrow \varphi(a) = \varphi(b)$$

よって、Rolleの定理により

$$\exists c \in (a,b), \, \varphi'(c) = 0 \iff (b-c)^{n-1} \left[\frac{nK}{(b-a)^n} - \frac{f^{(n)}(c)}{(n-1)!} \right] = 0$$

 $b \neq c$ であるから、

$$\frac{nK}{(b-a)^n} = \frac{f^{(n)}(c)}{(n-1)!}$$

よって,

$$K = \frac{(b-a)^n \cdot f^{(n)}(c)}{n \cdot (n-1)!} = \frac{(b-a)^n}{n!} f^{(n)}(c)$$

したがって.

$$f(b) = f(a) + \frac{(b-a)}{1!}f'(a) + \frac{(b-a)^2}{2!}f''(a) + \dots + \frac{(b-a)^{n-1}}{(n-1)!}f^{(n-1)}(a) + \frac{(b-a)^n}{n!}f^{(n)}(c)$$

(証明終)

系 1

$$f(a+h) = f(a) + \frac{h}{1!}f'(a) + \frac{h^2}{2!}f''(a) + \dots + \frac{h^{n-1}}{(n-1)!}f^{(n-1)}(a) + \frac{h^n}{n!}f^{(n)}(a+\theta h), 0 < \exists \theta < 1$$
 (証明) 定理 5 で

$$a < c < b$$
 より $\theta \stackrel{\leftarrow}{=} \frac{c-a}{b-a}$ とおくと,
$$0 < \theta < 1, \ c = a + \theta(b-a)$$

また,

$$h \stackrel{\leftarrow}{=} b - a$$

とおくと,

$$b = a + h$$
, $c = a + \theta(b - a) = a + \theta h$

(証明終)

系 2

$$f(x) = f(a) + \frac{(x-a)}{1!}f'(a) + \frac{(x-a)^2}{2!}f''(a) + \dots + \frac{(x-a)^{n-1}}{(n-1)!}f^{(n-1)}(a) + R_n(x)$$

但し, $R_n(x)$ はLagrangeの剰余:

$$R_n(x) = \frac{(x-a)^n}{n!} f^{(n)} (a + \theta(x-a)), \ 0 < \exists \theta < 1$$

(証明) 略

系 3 (Taylor 展開)

$$f \in C^{\infty}$$
で、かつ、系 2 における $R_n(x)$ が、 $\lim_{n \to +\infty} R_n(x) = 0$ のとき、 $f(x) = f(a) + \frac{(x-a)}{1!} f'(a) + \frac{(x-a)^2}{2!} f''(a) + \cdots$
$$\left(= \sum_{k=0}^{+\infty} \frac{(x-a)^k}{k!} f^{(k)}(a) \right)$$
 但し、 $0! = 1$, $f^{(0)}(a) = f(a)$ とする.

(証明)略

定理 6: Maclaurin の定理

$$f \in C^n(0 \ \mathcal{O} \ \exists \ \mathfrak{h} \ \mathfrak{C}) \Longrightarrow 0 <^\exists \ \theta < 1,$$

$$f(x) = f(0) + \frac{x}{1!}f'(0) + \frac{x^2}{2!}f''(0) + \dots + \frac{x^{n-1}}{(n-1)!}f^{(n-1)}(0) + \frac{x^n}{n!}f^{(n)}(\theta x)$$

(証明)

Taylor の定理の系 2 で,a = 0 とすればよい.

(証明終)

系:(Maclaurin 展開)

$$f \in C^{\infty}$$
で、かつ、 $R_n(x) = \frac{x^n}{n!} f^{(n)}(\theta x)$ が、 $\lim_{n \to +\infty} R_n = 0$ をみたせば、 $f(x) = f(0) + \frac{x}{1!} f'(0) + \frac{x^2}{2!} f''(0) + \cdots$
$$\left(= \sum_{k=0}^{+\infty} \frac{x^k}{k!} f^{(k)}(0) \right)$$
 但し、 $0! = 1$ 、 $f^{(0)}(a) = f(a)$ とする.

(証明) 略

Maclaurin の定理 例題

例題 $f(x) = e^x$

(解)

$$f \in C^{\infty}$$
 すなわち $\forall n \in \mathbf{N}, f \in C^{n}(\mathbf{R})$
$$f^{(n)}(x) = e^{x}, f^{(n)}(0) = 1$$

よって、Maclaurin の定理から、

また, $0<\theta<1$ だから, x>0 のとき, $e^{\theta x}< e^x$, x<0 のとき $e^{\theta x}<1$ よって, $(e^{\theta x}$ は有限の値だから)

$$\lim_{n \to +\infty} |R_n(x)| = \lim_{n \to +\infty} \frac{|x|^K}{K!} \cdot \frac{|x|}{K+1} \cdot \frac{|x|}{K+2} \cdots \frac{|x|}{n} \cdot e^{\theta x}$$

$$\leq \lim_{n \to +\infty} \frac{|x|^K}{K!} \left(\frac{1}{2}\right)^{n-K} e^{\theta x}$$

$$= 0$$

したがって,

 $\lim_{n\to +\infty} R_n = 0$ をみたすので, $x \in \mathbf{R}$ で e^x は Maclaurin 展開が可能である.

$$e^x = 1 + \frac{x}{1!} + \frac{x^2}{2!} + \frac{x^3}{3!} + \frac{x^4}{4!} + \cdots$$

$$\left(= \sum_{n=0}^{+\infty} \frac{x^n}{n!} \right)$$
但し、 $0! = 1$ とする

例題 $f(x) = \sin x$

(解)

 $f \in C^{\infty}(\mathbf{R}), f^{(n)}(x) = \sin(x + \frac{n\pi}{2}), f^{(n)}(0) = \sin(\frac{n\pi}{2})$

したがって,

$$\sin x = 0 + \frac{x}{1!} \cdot 1 + \frac{x^2}{2!} \cdot 0 + \frac{x^3}{3!} \cdot (-1) + \frac{x^4}{4!} \cdot 0 + \dots$$

$$\implies \sin x = \frac{x}{1!} - \frac{x^3}{3!} + \frac{x^5}{5!} - \frac{x^7}{7!} + \cdots$$
$$\left(= \sum_{n=0}^{+\infty} (-1)^n \frac{x^{2n+1}}{(2n+1)!} \right)$$

 $(x \in \mathbf{R})$

例題 $f(x) = \cos x$

(解)

$$f \in C^{\infty}(\mathbf{R}), f^{(n)}(x) = \cos(x + \frac{n\pi}{2}), f^{(n)}(0) = \cos(\frac{n\pi}{2})$$

したがって,

$$\cos x = 1 + \frac{x}{1!} \cdot 0 + \frac{x^2}{2!} \cdot (-1) + \frac{x^3}{3!} \cdot 0 + \frac{x^4}{4!} \cdot 1 + \cdots$$

$$\implies \cos x = 1 - \frac{x^2}{2!} + \frac{x^4}{4!} - \frac{x^6}{6!} + \cdots$$

$$\left(= \sum_{n=0}^{+\infty} (-1)^n \frac{x^{2n}}{(2n)!} \right)$$

 $(x \in \mathbf{R})$

Euler の公式

Maclaurin 展開により、 $x \in \mathbf{R}$ のとき

$$e^x = 1 + \frac{x}{1!} + \frac{x^2}{2!} + \frac{x^3}{3!} + \frac{x^4}{4!} + \cdots$$

となるが (等式), これを拡張して, $z \in \mathbb{C}$ のとき, 定義式

$$e^{z} \stackrel{\leftarrow}{=} 1 + \frac{z}{1!} + \frac{z^{2}}{2!} + \frac{z^{3}}{3!} + \frac{z^{4}}{4!} + \cdots \left(= \sum_{n=0}^{+\infty} \frac{z^{n}}{n!}\right)$$

とおく. $z = i\theta$, ここに, i は虚数単位 ($i^2 = -1$), $\theta \in \mathbf{R}$, すなわち, 純虚数のとき,

 $=\cos\theta + i\sin\theta$

$$e^{i\theta} = 1 + \frac{i\theta}{1!} + \frac{(i\theta)^2}{2!} + \frac{(i\theta)^3}{3!} + \frac{(i\theta)^4}{4!} + \dots \left(= \sum_{n=0}^{+\infty} \frac{(i\theta)^n}{n!} \right)$$

$$= 1 + \frac{i\theta}{1!} + \frac{i^2\theta^2}{2!} + \frac{i^3\theta^3}{3!} + \frac{i^4\theta^4}{4!} + \dots \left(= \sum_{n=0}^{+\infty} \frac{i^n\theta^n}{n!} \right)$$

$$= \left(1 - \frac{x^2}{2!} + \frac{x^4}{4!} - \frac{x^6}{6!} + \dots \right) + i\left(\frac{x}{1!} - \frac{x^3}{3!} + \frac{x^5}{5!} - \frac{x^7}{7!} + \dots \right)$$

$$\left(= \left[\sum_{n=0}^{+\infty} (-1)^n \frac{x^{2n}}{(2n)!} \right] + i\left[\sum_{n=0}^{+\infty} (-1)^n \frac{x^{2n+1}}{(2n+1)!} \right] \right)$$

ここで、 $\theta = \pi$ のとき、

$$e^{i\pi} = \cos \pi + i \sin \pi = -1 + i \cdot 0 = -1$$

例題
$$\cos(2\theta) = (\cos \theta)^2 - (\sin \theta)^2$$
 $\sin(2\theta) = 2\cos \theta \sin \theta$ (解)

一方,

$$e^{i(2\theta)} = e^{(i\theta)\cdot 2} = (e^{i\theta})^2$$
$$= (\cos\theta + i\sin\theta)^2$$

 $e^{i(2\theta)} = \cos(2\theta) + i\sin(2\theta)$

$$= (\cos \theta)^2 + 2(\cos \theta) \cdot (i \sin \theta) + (i \sin \theta)^2$$
$$= (\cos \theta)^2 + i(2 \cos \theta \sin \theta) - (\sin \theta)^2$$

$$= \{(\cos \theta)^2 - (\sin \theta)^2\} + i(2\cos \theta \sin \theta)$$

したがって, (2倍角の公式)

$$\cos(2\theta) = (\cos \theta)^2 - (\sin \theta)^2$$
$$\sin(2\theta) = 2\cos \theta \sin \theta$$

例題 $f(x) = \log(1+x) \quad (-1 < x \le 1)$

(解)

$$f^{(n)}(x) = (-1)^{n-1} \frac{(n-1)!}{(1+x)^n}, f^{(n)}(0) = (-1)^{n-1} (n-1)!$$

$$\log(1+x) = 0 + \frac{x}{1!} \cdot 1 + \frac{x^2}{2!} \cdot (-1) \cdot 1! + \frac{x^3}{3!} \cdot (-1)^2 \cdot 2! + \frac{x^4}{4!} \cdot (-1)^3 \cdot 3! + \cdots$$

$$\implies \log(1+x) = x - \frac{x^2}{2} + \frac{x^3}{3} - \frac{x^4}{4} + \cdots$$

$$\left(= \sum_{n=1}^{+\infty} (-1)^{n+1} \frac{x^n}{n} \right)$$

問: Euler の公式を利用して, 次の関係式を示せ.

$$\cos(x+y) = \cos x \cos y - \sin x \sin y$$

$$\sin(x+y) = \cos x \sin y + \sin x \cos y$$

(解)

$$e^{i(x+y)} = \cos(x+y) + i\sin(x+y)$$

一方,
$$e^{i(x+y)} = e^{ix+iy} = e^{ix} \cdot e^{iy}$$

$$= (\cos x + i\sin x)(\cos y + i\sin y)$$

$$= \cos x \cos y + \cos x(i\sin y) + (i\sin x)\cos y + (i\sin x)(i\sin y)$$

$$= \cos x \cos y - \sin x \sin y + i(\cos x \sin y + \sin x \cos y)$$
したがって,(加法定理)

$$cos(x + y) = cos x cos y - sin x sin y$$

$$sin(x + y) = cos x sin y + sin x cos y$$

問:次の関数を級数展開 (Maclaurin 展開) せよ.

(1)
$$f(x) = \frac{1}{\sqrt{1-x}} \quad (-1 \le x < 1)$$

(2)
$$f(x) = \log(1 - x) \quad (-1 \le x < 1)$$

(解)

(1)

$$f(x) = \frac{1}{\sqrt{1-x}} = (1-x)^{-\frac{1}{2}}$$

$$\implies f'(x) = -\frac{1}{2}(1-x)^{-\frac{3}{2}} \cdot (-1) = \frac{1}{2}(1-x)^{-\frac{3}{2}}$$

$$f''(x) = \frac{1}{2} \cdot \frac{3}{2} \cdot (1+x)^{-\frac{5}{2}}$$

$$f'''(x) = \frac{1}{2} \cdot \frac{3}{2} \cdot \frac{5}{2} \cdot (1+x)^{-\frac{7}{2}}$$

$$f^{(4)}(x) = \frac{1}{2} \cdot \frac{3}{2} \cdot \frac{5}{2} \cdot \frac{7}{2} \cdot (1+x)^{-\frac{9}{2}}$$

$$f^{(n)}(x) = \frac{1}{2} \cdot \frac{3}{2} \cdot \dots \cdot \frac{(2n-1)}{2} \cdot (1+x)^{-\frac{(2n+1)}{2}}$$

$$f^{(n)}(0) = \frac{1}{2} \cdot \frac{3}{2} \cdot \dots \cdot \frac{(2n-1)}{2}$$

$$= \frac{1}{2^n} \{1 \cdot 3 \cdot \dots \cdot (2n-1)\}$$

$$= \frac{1}{2^n} \cdot \frac{(2n)!}{2^n \cdot n!}$$

$$= \frac{(2n)!}{2^{2n}n!}$$

$$\frac{1}{\sqrt{1-x}} = 1 + \frac{x}{1!} \frac{2!}{2^2 \cdot 1!} + \frac{x^2}{2!} \frac{4!}{2^4 \cdot 2!} + \frac{x^3}{3!} \frac{6!}{2^6 \cdot 3!} + \frac{x^4}{4!} \frac{8!}{2^8 \cdot 4!} + \cdots$$

$$= 1 + \frac{2!x}{2^2(1!)^2} + \frac{4!x^2}{2^4(2!)^2} + \frac{6!x^3}{2^6(3!)^2} + \frac{8!x^4}{2^8(4!)^2} + \cdots$$

$$= \sum_{k=0}^{+\infty} (-1)^k \frac{(2k)!x^k}{2^{2k}(k!)^2} \quad (但し, 0! = 1)$$

$$\frac{1}{\sqrt{1+x}} = 1 + \frac{x}{2} + \frac{3x^2}{8} + \frac{5x^3}{16} + \frac{35x^4}{128} + \cdots \quad (4 \times 0)$$

$$\frac{1}{\sqrt{1+x}} = \frac{1}{2} + \frac{x}{2} + \frac{3x^2}{8} + \frac{5x^3}{16} + \frac{35x^4}{128} + \cdots \quad (4 \times 0)$$

(2)

$$f(x) = \log(1-x)$$

$$\Rightarrow f'(x) = \frac{1}{1-x} \cdot (1-x)' = -(1-x)^{-1}$$

$$f''(x) = -(-1)(1-x)^{-2} \cdot (-1) = -1!(1-x)^{-2}$$

$$f'''(x) = -(-1)(-2)(1-x)^{-3} \cdot (-1)^2 = -2!(1-x)^{-3}$$

$$f^{(4)}(x) = -(-1)(-2)(-3)(1-x)^{-4} \cdot (-1)^3 = -3!(1-x)^{-4}$$

$$f^{(n)}(x) = -(n-1)!(1-x)^{-n}$$

$$f^{(n)}(0) = -(n-1)!$$

$$\log(1-x) = 0 + \frac{x}{1!} \cdot (-1) + \frac{x^2}{2!} \cdot (-1!) + \frac{x^3}{3!} \cdot (-2!) + \frac{x^4}{4!} \cdot (-3!) + \cdots$$

$$= -\left[\frac{x}{1} + \frac{x^2}{2} + \frac{x^3}{3} + \frac{x^4}{4} + \cdots\right]$$

$$= -\sum_{k=1}^{+\infty} \frac{x^k}{k}$$

$$\log(1-x) = -\left(x + \frac{x^2}{2} + \frac{x^3}{3} + \frac{x^4}{4} + \cdots\right)$$
 (4次の項まで)

追加の例題

$$f(x) = \frac{1}{\sqrt{1+x}} = (1+x)^{-\frac{1}{2}}$$

$$\implies f'(x) = -\frac{1}{2}(1+x)^{-\frac{3}{2}} \cdot 1$$

$$f''(x) = (-\frac{1}{2})(-\frac{3}{2})(1+x)^{-\frac{5}{2}}$$

$$f'''(x) = (-\frac{1}{2})(-\frac{3}{2})(-\frac{5}{2})(1+x)^{-\frac{7}{2}}$$

$$f^{(4)}(x) = (-\frac{1}{2})(-\frac{3}{2})(-\frac{5}{2})(-\frac{7}{2})(1+x)^{-\frac{9}{2}}$$

$$f^{(n)}(x) = (-\frac{1}{2})(-\frac{3}{2})\cdots(-\frac{(2n-1)}{2})(1+x)^{-\frac{(2n+1)}{2}}$$

$$f^{(n)}(0) = (-\frac{1}{2})(-\frac{3}{2})\cdots(-\frac{(2n-1)}{2})$$

$$= (-1)^{n}\frac{1}{2^{n}}\{1\cdot 3\cdots(2n-1)\}$$

$$= (-1)^{n}\frac{1}{2^{n}}\cdot\frac{(2n)!}{2^{n}\cdot n!}$$

$$= \frac{(-1)^{n}(2n)!}{2^{2n}n!}$$

関数の増減

$$f(x): (a,b)$$
 で増加 $\iff {}^{\forall}x_1, {}^{\forall}x_2 \in (a,b), x_1 < x_2 \to f(x_1) < f(x_2)$ $f(x): (a,b)$ で減少 $\iff {}^{\forall}x_1, {}^{\forall}x_2 \in (a,b), x_1 < x_2 \to f(x_1) > f(x_2)$

定理 7
$$f \in C^1, \forall x \in (a, b), f'(x) = 0 \Longrightarrow f(x) : 一定$$

(証明)

$$\forall x_1, \, \forall x_2 \in (a,b), x_1 < x_2 \Longrightarrow \underline{\mathbb{P}$$
均値の定理 より $\exists c \in (x_1,x_2), f'(c) = \frac{f(x_2) - f(x_1)}{x_2 - x_1}$ $\forall x \in (a,b), f'(x) = 0$ であり, $c \in (x_1,x_2)$ であるから $c \in (a,b)$, したがって, $f'(c) = 0$
$$\frac{f(x_2) - f(x_1)}{x_2 - x_1} = 0 \Longrightarrow f(x_2) - f(x_1) = 0$$
 $\forall x_1, \, \forall x_2 \in (a,b), f(x_1) = f(x_2)$ すなわち $f : -$ 定

(証明終)

定理 8
$$f \in C^1$$
,
$$\begin{cases} \forall x \in (a,b), f'(x) > 0 \Longrightarrow f: (a,b)$$
で増加
$$\forall x \in (a,b), f'(x) < 0 \Longrightarrow f: (a,b)$$
で減少

(証明)

$$\forall x_1, \forall x_2 \in (a,b), x_1 < x_2 \Longrightarrow$$
 平均値の定理 より $\exists c \in (x_1,x_2), f'(c) = \frac{f(x_2) - f(x_1)}{x_2 - x_1}$

(ii)
$$\forall x \in (a,b), f'(x) < 0 \text{ のとき}, (i) と同様に f'(c) < 0$$

$$\frac{f(x_2) - f(x_1)}{x_2 - x_1} < 0 , \ x_1 < x_2 \Longrightarrow f(x_2) - f(x_1) < 0$$

$$\forall x_1, \ \forall x_2 \in (a,b), x_1 < x_2, \ f(x_1) > f(x_2) \text{ すなわち } f: (a,b) \text{ で減少}$$

(証明終)

例題
$$f(x) = x \log x \ (x > 0)$$
 のとき, $y = f(x)$ のグラフの概形を描け.

(解)
$$y$$
 切片: なし, x 切片: $f(x) = 0 \leftrightarrow \log x = 0 \leftrightarrow x = 1$

増加,減少について調べる.

$$f \in C^1$$
, $f'(x) = (x)' \log x + x(\log x)' = \log x + 1$ より
$$f'(x) = 0 \leftrightarrow x = e^{-1}$$

$$0 < x < e^{-1}, f'(x) < 0 \Longrightarrow f : 減少$$

$$e^{-1} < x, f'(x) > 0 \Longrightarrow f : 増加$$

左右の右側極限,左側極限を調べる.

$$\lim_{x \to +0} f(x) = \lim_{x \to +0} x \log x$$

$$= \lim_{x \to +0} \frac{\log x}{\frac{1}{x}}$$
L'Hospital \longrightarrow

$$= \lim_{x \to +0} \frac{(\log x)'}{(x^{-1})'}$$

$$= \lim_{x \to +0} \frac{\frac{1}{x}}{-x^{-2}}$$

$$= \lim_{x \to +0} -\frac{x^2}{x}$$

$$= \lim_{x \to +0} (-x)$$

$$= 0$$

$$\lim_{x \to +\infty} f(x) = \lim_{x \to +\infty} x \log x$$
$$= +\infty (極限は存在しない)$$

増減表

x	+0 ←		e^{-1}		$\rightarrow +\infty$
f'(x)		_	0	+	
f(x)	-0	×	$-e^{-1}$	7	$\nearrow +\infty$

(終)

関数の凹凸 (Concave, Convex)

$$\forall x_1, \, \forall x_2, \, \forall x_3 \in (a, b), \, x_1 < x_2 < x_3$$

極値問題

$$f(a)$$
: 極小値 $\cdots x = a$ の附近で $f(a)$: 最小値 $\Longleftrightarrow 0 < |h| << 1, f(a+h) \stackrel{>}{(=)} f(a)$

$$f(a)$$
: 極大値 $\cdots x = a$ の附近で $f(a)$: 最大値 $\Longleftrightarrow 0 < |h| << 1, f(a+h) \stackrel{<}{=})f(a)$

定理 A: 極値となるための必要条件

$$f \in C^1(a \text{ の附近で}), f(a):$$
極大値/極小値 $\stackrel{\Longrightarrow}{\longleftarrow} f'(a) = 0$

(証明) ⇒)

f(a):極小値のとき

$$\begin{aligned}
h > 0 &\Longrightarrow \frac{f(a+h) - f(a)}{h} > 0 \Longrightarrow \lim_{h \to +0} \frac{f(a+h) - f(a)}{h} \ge 0 \\
h < 0 &\Longrightarrow \frac{f(a+h) - f(a)}{h} < 0 \Longrightarrow \lim_{h \to -0} \frac{f(a+h) - f(a)}{h} \le 0
\end{aligned}$$

\)

反例を示す

$$f(x) = x^3$$
のとき, $f'(x) = 3x^2$, $f'(x) = 0 \Leftrightarrow x = 0$

しかし, x = 0 は増加 (の途中の) 点であり, 極値点ではない.

(注意) このような点は変曲点 (その前後で f''の符号が変る点) である.

(証明終)

<u>定理 B</u>: 極値となるための十分条件 $f \in C^2(a$ の附近で) , f'(a) = 0 , $\begin{cases} f''(a) > 0 \Longrightarrow f(a) : 極小値 \\ f''(a) < 0 \Longrightarrow f(a) : 極大値 \end{cases}$

(証明) $\varphi(h) \stackrel{\leftarrow}{=} f(a+h) - f(a) とおく.$

 $f \in C^2$, Taylor の定理より, $f(a+h) = f(a) + \frac{h}{1!}f'(a) + \frac{h^2}{2!}f''(a+\theta h)$ ($0 < \exists \theta < 1$), また, f'(a) = 0

したがって $\varphi(h) = \frac{h^2}{2!} f''(a + \theta h)$

ここで, $\sigma \stackrel{\leftarrow}{=} f''(a+\theta h) - f''(a)$ とおくと

$$\varphi(h) = \frac{h^2}{2!}f''(a) + \frac{h^2}{2!}\sigma$$

ここで, $h \longrightarrow 0$ とすると, f''は連続であり, また, f''(a) は定数であるから, $|\sigma| < |f''(a)|$ とすることができるしたがって, h を十分小さくとると,

(i)
$$f''(a) > 0 \implies \varphi(h) > 0 \implies f(a+h) > f(a) \implies f(a)$$
:極小値

(ii)
$$f''(a) < 0 \implies \varphi(h) < 0 \implies f(a+h) < f(a) \implies f(a)$$
: 極大値

$$n=2m\,,\,m\in\mathbf{N}^+$$
 定理 $\underline{\mathbf{C}}$:
$$f\in C^n(a\,\mathcal{O}$$
附近で) $,\,f^{(k)}(a)=0\;(1\leq k\leq n-1)$
$$\begin{cases} f^{(n)}(a)>0\Longrightarrow f(a):$$
 極小値
$$f^{(n)}(a)<0\Longrightarrow f(a):$$
 極大値

(証明)
$$\varphi(h) \stackrel{\leftarrow}{=} f(a+h) - f(a) とおく.$$

 $f \in C^n$, Taylor の定理より,

$$\varphi(h) = \left[f(a) + \frac{h}{1!}f'(a) + \frac{h^2}{2!}f''(a) + \dots + \frac{h^{n-1}}{(n-1)!}f^{(n-1)}(a) + \frac{h^n}{n!}f^{(n)}(a+\theta h)\right] - f(a) \ (0 < ^{\exists}\theta < 1)$$
 また, $f^{(k)}(a) = 0 \ (1 \le k \le n-1)$ より
$$\varphi(h) = \frac{h^n}{n!}f^{(n)}(a+\theta h)$$
 ここで, $\sigma = f^{(n)}(a+\theta h) - f^{(n)}(a)$ とおくと
$$\varphi(h) = \frac{h^n}{n!}f^{(n)}(a) + \frac{h^n}{n!}\sigma$$
 ここで, $h \longrightarrow 0$ とすると, $f^{(n)}$ は連続であり, また, $f^{(n)}(a)$ は定数であるから,

 $|\sigma| < |f^{(n)}(a)|$ とすることができる

したがって, h を十分小さくとると,

 $(n \text{ は偶数であるから } h \text{ の正負によらず } h^n > 0 \text{ であることに注意すると})$

(i)
$$f^{(n)}(a) > 0 \implies \varphi(h) > 0 \implies f(a+h) > f(a) \implies f(a) :$$
 極小値

(ii)
$$f^{(n)}(a) < 0 \implies \varphi(h) < 0 \implies f(a+h) < f(a) \implies f(a)$$
: 極大値

$$n=2m+1, m \in \mathbf{N}$$

系:
$$f \in C^n(a \text{ の附近で}), f^{(k)}(a) = 0 \ (1 \le k \le n-1) \ \begin{cases} f^{(n)}(a) > 0 \Longrightarrow f(a) : 増加点 \\ f^{(n)}(a) < 0 \Longrightarrow f(a) : 減少点 \end{cases}$$
 極値点ではない

ここで, $h \longrightarrow 0$ とすると, $f^{(n)}$ は連続であり,また, $f^{(n)}(a)$ は定数であるから,

$$|\sigma| < |f^{(n)}(a)|$$
 とすることができる

したがって, hを十分小さくとると,

(n は奇数であるから $h > 0 \longrightarrow h^n > 0$, $h < 0 \longrightarrow h^n < 0$ であることに注意すると

(i)
$$f^{(n)}(a) > 0$$

$$\begin{cases} h > 0 \Longrightarrow \varphi(h) > 0 \Longrightarrow f(a+h) > f(a) \\ h < 0 \Longrightarrow \varphi(h) < 0 \Longrightarrow f(a+h) < f(a) \end{cases}$$
 $f(a) : 増加点$ (注意) $n \ge 3$ の場合これらの
$$h > 0 \Longrightarrow \varphi(h) < 0 \Longrightarrow f(a+h) < f(a) \end{cases}$$
 $f(a) : im \triangle$ (注意) $f(a) \ge 3$ の場合これらの
$$h > 0 \Longrightarrow \varphi(h) > 0 \Longrightarrow f(a+h) > f(a) \end{cases}$$
 $f(a) : im \triangle$

極値問題アルゴリズム

極直向超ノルコリスム

(1) 極値の候補をみつける $f'(x) = 0 : x = a_1, a_2, \dots, a_p$ (定理 A)

(2) 判別する
$$\begin{cases} f''(a_i) > 0 \Longrightarrow f(a_i) : 極小値 \\ f''(a_i) < 0 \Longrightarrow f(a_i) : 極大値 \end{cases}$$
 (定理 B)
$$f''(a_i) = 0 \Longrightarrow f(a_i) : 極値点/変曲点 (定理 Cおよびその系)$$

例題 $f(x) = xe^{-x}$ の極値を求めよ.また,グラフの概形を描け.

(解)
$$f'(x) = (1-x)e^{-x}$$

$$f''(x) = (x-2)e^{-x}$$

$$f'(x) = 0 \Longleftrightarrow x = 1$$

$$f''(1) = -e^{-1} < 0 \longrightarrow f(1) = e^{-1} : 極大値$$

$$y 切片 : f(0) = 0, x 切片 f(x) = 0 \Longleftrightarrow x = 0$$

$$f''(x) = 0 \Longleftrightarrow x = 2, f'''(x) = (3-x)e^{-x}, f'''(2) = e^{-2} \neq 0 \longrightarrow f(2) = 2e^{-2} : 変曲点$$

$$\lim_{x \to +\infty} f(x) = \lim_{x \to +\infty} xe^{-x} = -\infty (極限なし)$$

$$\lim_{x \to +\infty} f(x) = \lim_{x \to +\infty} xe^{-x} = \lim_{x \to +\infty} \frac{x}{e^x} \quad \downarrow \lim_{x \to +\infty} \frac{1}{e^x} = +0$$

<u>例題</u> $f(x) = \cos x + \frac{x^2}{2} - \frac{x^4}{24} - 1$ は, x = 0 で極値をとるか.

$$f'(x) = -\sin x + x - \frac{x^3}{6}$$
 $f'(0) = -0 + 0 - 0 = 0$ よって、 $f(0)$ は極値の候補である。
$$f''(x) = -\cos x + 1 - \frac{x^2}{2}$$
 $f''(0) = -1 + 1 - 0 = 0$
$$f'''(x) = \sin x - x$$
 $f'''(0) = 0 - 0 = 0$
$$f^{(4)}(x) = \cos x - 1$$
 $f^{(4)}(x) = -\sin x$ $f^{(5)}(x) = -\sin x$ $f^{(5)}(x) = -\cos x$ $f^{(6)}(x) = -1 < 0$

6 は偶数.したがって, f(0) = 1 + 0 - 0 - 1 = 0:極大値

演習問題

次の関数の極値を求めよ.

$$f(x) = e^{-\frac{x^2}{2}}$$

$$f(x) = \frac{e^x}{x}$$

$$f(x) = x^4 - 2$$

(4)
$$f(x) = 60x^7 - 70x^6 - 84x^5 + 105x^4 + 100$$

演習問題解答

次の関数の極値を求めよ.

(1)
$$f(x) = e^{-\frac{x^2}{2}}$$

解: f(0) = 1:極大値

解説

$$f'(x) = (-x) e^{-\frac{x^2}{2}}$$

$$f''(x) = -e^{-\frac{x^2}{2}} + x^2 e^{-\frac{x^2}{2}}$$

$$= (x^2 - 1) e^{-\frac{x^2}{2}}$$

$$f'(x) = 0 \Leftrightarrow x = 0$$

$$f''(0) = -1 < 0 \Rightarrow f(0) :$$
 極大値
$$f(0) = 1$$

$$f(x) = \frac{e^x}{x}$$
解: $f(1) = e$: 極小値
解説

$$f(x) = x^{-1} e^x$$

$$f'(x) = (-1)x^{-2} e^x + x^{-1} e^x$$

$$= (-x^{-2} + x^{-1}) e^x$$

$$\left(= \frac{xe^x - e^x}{x^2} \right)$$

$$f''(x) = (2x^{-3} - x^{-2})e^x + (-x^{-2} + x^{-1})e^x$$

$$= (2x^{-3} - 2x^{-2} + x^{-1})e^x$$

$$= \frac{(e^x + xe^x - e^x)x^2 - (xe^x - e^x)2x}{x^4}$$

$$= \frac{x^3e^x - 2x^2e^x + 2xe^x}{x^4}$$

$$= \frac{x^2e^x - 2xe^x + 2e^x}{x^3}$$

$$f'(x) = 0 \Leftrightarrow x - 1 = 0 \Leftrightarrow x = 1$$

$$f''(1) = (2 - 2 + 1) \cdot e^1 = e > 0 \Rightarrow f(1) : 極小値$$

$$f(1) = e$$

(3)
$$f(x) = x^4 - 2$$

解: $f(0) = -2$: 極小値
解説

$$f'(x) = 4x^{3}$$

$$f''(x) = 12x^{2}$$

$$f'(x) = 0 \iff x = 0$$

$$f''(0) = 0$$

$$f'''(x) = 24x$$

$$f'''(0) = 0$$

$$f^{(4)}(x) = 24$$

$$f^{(4)}(x) = 24$$

$$f(4)(0) = 24 > 0 \implies f(0) = 0 - 2 = -2 : 極小値$$
解: $f(0) = -2 : 極小値$

$$f(x) = 60x^7 - 70x^6 - 84x^5 + 105x^4 + 100$$
 解: $f(-1) = 159$:極大値, $f(0) = 100$:極小値 解説

$$f'(x) = 420x^{6} - 420x^{5} - 420x^{4} + 420x^{3}$$

$$\frac{f'(x)}{420} = x^{6} - x^{5} - x^{4} + x^{3} = (x - 1)^{2}(x + 1)x^{3}$$

$$\frac{f''(x)}{420} = 6x^{5} - 5x^{4} - 4x^{3} + 3x^{2}$$

$$f'(x) = 0 \iff x = 0, 1, -1$$

$$f''(0) = 420(0 - 0 - 0 + 0) = 0$$

$$f''(1) = 420(6 - 5 - 4 + 3) = 0$$

$$f''(-1) = 420(-6 - 5 + 4 + 3) = 420 \times (-4) < 0$$

$$\implies f(-1) = -60 - 70 + 84 + 105 + 100 = 159 :$$
 極大値

$$\frac{f'''(x)}{420} = 30x^4 - 20x^3 - 12x^2 + 6x$$

$$f'''(0) = 420(0 - 0 - 0 + 0) = 0$$
$$f'''(1) = 420(30 - 20 - 12 + 6) = 420 \times 4 > 0$$
$$\implies f(1) = 60 - 70 - 84 + 105 + 100 = 111 : 増加点$$

$$\frac{f^{(4)}(x)}{420} = 120x^3 - 60x^2 - 24x + 6$$

 $f^{(4)}(0) = 420(0-0-0+6) = 420 \times 6 > 0 \Longrightarrow f(0) = 0-0-0+0+100 = 100$:極小値

解 f(-1) = 159:極大値, f(0) = 100:極小値

経済学への応用 -短期利潤の最適化問題-

1 変数関数の極値問題の経済学への応用として,短期利潤の最適化問題について述べる.これは,「1 変数関数の等式制約条件付き最適化問題」とも呼ばれる.

まず,経済学への応用に際し,よく使われる用語,記号と仮定を述べる.基本的な仮定は「生産者も消費者も合理的に行動する」ということである.いま,一つの消費財を生産する生産者(企業など)について考える場合に,生産財の産出量をy,労働投入量を ℓ (≥ 0),労働 1 単位当たりのコスト (賃金)をw(≥ 0 ,定数),資本投入量をk(≥ 0),資本 1 単位当たりのコスト (レンタル料)をr(≥ 0 ,定数)とし,生産した財はすべて価格p(> 0)で売れると仮定する.利潤は,総収入-総費用で求める.

短期利潤の最適化問題 (極値問題の応用)

短期利潤の最適化を考える場合は、資本投入量を k を定数と考えて $\overline{k}=k$ とし、最適解を求める。また、生産関数 $y=f(\ell)$ は ℓ に関し単調増加(すなわち、労働投入量が増加すれば生産財の産出量が増加すること)を仮定する。利潤関数 $\Pi(\ell)$ は $\Pi(\ell)=p\cdot y-w\ell-r\overline{k}=pf(\ell)-w\ell-r\overline{k}$ ($r\overline{k}$ は定数) となる。

このとき, $\Pi'(\ell) = pf'(\ell) - w$, $\Pi''(\ell) = pf''(\ell)$ であるから, $\ell = \ell^*$ のとき $\Pi'(\ell^*) = 0$, $\Pi''(\ell^*) < 0$ であれば, $\Pi(\ell^*)$ が極大値である.

(注) $y^* = f(\ell^*)$ とおくと, $\Pi(\ell^*) = pf(\ell^*) - w\ell^* - r\overline{k} = py^* - w\ell^* - r\overline{k}$ である.このとき, ℓ^* は定数なので, y^* は p だけの関数として表すことができるが, $y^* = \frac{\Pi(\ell^*) + w\ell^* + r\overline{k}}{p} = S(p)$ と表すときの S(p) を供給関数という.

例

 $f(\ell)=\ell^{\frac{2}{3}}, p=4, w=2, C=r\overline{k}=10$ のとき,利潤関数 $\Pi(\ell)$ を求めよ. また, 最適労働投入量 ℓ^* とそのときの生産量 $y^*(y$ の最大値) を求めよ.

利潤関数は $\Pi(\ell)=p\cdot f(\ell)-w\ell-C=4\ell^{\frac{2}{3}}-2\ell-10$ である. よって, $\Pi'(\ell)=4\cdot \frac{2}{3}\ell^{-\frac{1}{3}}-2=\frac{8}{3}\ell^{-\frac{1}{3}}-2,\ \Pi''(\ell)=-\frac{8}{9}\ell^{-\frac{4}{3}}<0.$

したがって、 Π は $\mathbf R$ 全体で凹関数 (上に凸) であるから、 $\Pi'(\ell)=0 \Leftrightarrow \frac{8}{3\sqrt[3]{\ell}}=2$ よって、 $\ell^*=(\frac{4}{3})^3=\frac{64}{27}$ で Π は極大値を持つ.このとき、 $y^*=f((\frac{4}{3})^3)=(\frac{4}{3})^2=\frac{16}{9}$ である.

(注) $f'(\ell) = \frac{2}{3}\ell^{-\frac{1}{3}} > 0$, $f''(\ell) = -\frac{2}{9}\ell^{-\frac{4}{3}} < 0$ であるから, f は単調増加な凹関数である.

問

 $f(\ell)=\ell^{\frac{3}{5}}, p=1, w=1, C=r\overline{k}=10$ のとき、利潤関数 $\pi(\ell)$ を求めよ. また、最適労働投入量 ℓ^* とそのときの生産量 $y^*(y)$ の最大値)を求めよ.

解

 $f(\ell)=\ell^{\frac{3}{5}}, p=1, w=1, C=r\overline{k}=10$ のとき,利潤関数 $\pi(\ell)$ を求めよ.また,最適労働投入量 ℓ^* とそのときの生産量 $y^*(y)$ の最大値) を求めよ.

利潤関数は $\Pi(\ell)=p\cdot f(\ell)-w\ell-C=\ell^{\frac{3}{5}}-\ell-10$ である。よって, $\Pi'(\ell)=\frac{3}{5}\ell^{-\frac{2}{5}}-1$, $\Pi''(\ell)=-\frac{6}{25}\ell^{-\frac{7}{5}}<0$ 。 $\Pi'(\ell)=0\Leftrightarrow \frac{3}{5\sqrt[5]{\ell^2}}=1\Leftrightarrow \frac{3}{5}=\sqrt[5]{\ell^2}\Leftrightarrow (\frac{3}{5})^5=\ell^2\Longrightarrow \ell^*=(\frac{3}{5})^{\frac{5}{2}}\Longrightarrow y^*=f((\frac{3}{5})^{\frac{5}{2}})=\{(\frac{3}{5})^{\frac{5}{2}}\}^{\frac{3}{5}}=(\frac{3}{5})^{\frac{3}{2}}$. (注) $f'(\ell)=\frac{3}{5}\ell^{-\frac{2}{5}}>0$, $f''(\ell)=-\frac{6}{25}\ell^{-\frac{7}{5}}<0$ すなわち, f は単調増加な凹(上に凸の)関数である.

例

 $f(\ell) = \ell^{\frac{2}{3}}, w = 1, C = r\overline{k} = 10$ のとき, 供給関数 $y^*(p)$ を求めよ $(y^* \in p)$ の関数として表わせ).

利潤関数は $\Pi(\ell)=p\cdot f(\ell)-w\ell-C=p\cdot\ell^{\frac{2}{3}}-\ell-10$ である. よって, $\Pi'(\ell)=\frac{2}{3}p\ell^{-\frac{1}{3}}-1$, $\Pi''(\ell)=-\frac{2}{9}p\ell^{-\frac{4}{3}}<0$. したがって, Π は R 全体で凹関数(上に凸)であるから. $\Pi'(\ell)=0\Leftrightarrow \frac{2p}{3\sqrt[3]{\ell}}=1\Longrightarrow \ell=(\frac{2}{3}p)^3$. よって, $\ell^*=(\frac{2}{3}p)^3$ で Π は極大値を持つ. また, Π が極大値をとるときの最適生産量 y^* は, $y^*(p)=f((\frac{2}{3}p)^3)=\{(\frac{2}{3}p)^3\}^{\frac{2}{3}}=(\frac{2}{3}p)^2$ である.

問

 $f(\ell)=\ell^{\frac{1}{3}}, w=3, C=r\overline{k}=10$ のとき,利潤関数 $\Pi(\ell)$ を求めよ. また, Π が極大値を取るときの最適生産量 y^* を p の関数として表す供給関数 $y^*(p)$ を求めよ.

解

利潤関数は $\Pi(\ell) = p \cdot f(\ell) - w\ell - C = p \cdot \ell^{\frac{1}{3}} - 3\ell - 10$ である. よって, $\Pi'(\ell) = \frac{1}{3}p\ell^{-\frac{2}{3}} - 3$, $\Pi''(\ell) = -\frac{2}{9}p\ell^{-\frac{5}{3}} < 0$. したがって, Π は \mathbf{R} 全体で凹(上に凸)な関数であるから, $\Pi'(\ell) = 0 \Leftrightarrow \frac{1}{3}p\ell^{-\frac{2}{3}} = 3 \Leftrightarrow \frac{p}{\sqrt[3]{\ell^2}} = 9 \Leftrightarrow \frac{p}{9} = \sqrt[3]{\ell^2} \Longrightarrow \ell^2 = (\frac{p}{9})^3 \Leftrightarrow \ell^* = \sqrt{(\frac{p}{9})^3}$ で Π は極大値をもつ.

 Π が極大値をもつときの最適生産量 y^* は $y^*(p)=f(\sqrt{(\frac{p}{9})^3})=\sqrt{\frac{p}{9}}=\frac{\sqrt{p}}{3}$ である.